よりによってこのヒロインか

チャーハン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

圧倒的な妖怪としての力がなかった。

天才的な陰陽師としての才能がなかった。

ただその少女は紛れもなく、他の誰よりも前を歩こうとした。

目次

プロローグ　1
一話　16
二話　35
三話　58
四話　77

プロローグ

――これは、夢なんだろうか。

人知れず呟いた少女が立つ場所は、様々な種類の草花が生い茂り、鈴虫のような羽音が鳴り響く自然豊かな丘の上。ふと首を上へと曲げれば、淡い幻想的な光を放つまあるい月を中心に、いくつもの星が雲一つない夜空でまたたいていた。

ただ、少女が普段住む場所とはかけ離れている。少女が普段住んでいる場所は、鉄筋コンクリートの無骨なビルが立ち並び、深夜でさえ明かりが消える事のない都会。そのためこの場に来るまでの最後の記憶がベッドの上だっただけに、少女が今の状態を夢の中だと思うのも無理はない。

少女は起きていると認識してる時に比べ、どこかふわふわとした心地。それも合わせてやはり夢だと改めて感じるのだろうが、目の前には日常では決して見る事のできない景色。

その景色を見る中で、大学生の少女はふと明日の朝からある授業を思い出す。だがそれも直ぐに忘れた。たとえ遅刻したとしても、むしろこの絶景なら御釣りがあると考えたのだ。

ただそう考えるのもつかの間、不意に少女の意志とは関係なく体が動き、夜空を見上げていた視線が右を向く。

まだ景色を見ていたかったという思いがなくもない。ただ夢だしな――と、そうも思いながら少女が視線へと意識を向ける。するとそこには、大根やネギ等の野菜を背負っている籠に入れ、どこを目指しているのか黙々と歩みを進める男が一人。

夜中というのもあり買い出し、もしくは仕事帰りの農民なのだろうか。夢のせいなのか、少女にはこの場所の気温が分からない。ただくたびれて古そうに見える着物の袖は、暑いのか左右両方とも捲(めく)られていた。

夢にしては凝った設定だな――そう若干失礼なことを考えながらも、変わらず少女の体は動いていく。それは自然に男の背後にまで移動したと思えば、すぐに男とほぼ変わらない速さで歩き出した。

あくまで夢とはいえ、自身が行っていることに思わず少女は呆れる。けれどそんな思いに変わらず、少女の体は視線以外の自由を失って歩き続けた。

対して急に背後を取られた男は、突然背後から足音がなり出したからだろう。誰の目から見ても明らかなほど、むしろ不憫に思えるほど震えている。少女が考えていた通り、虫の音や男の格好からして季節は夏なのだろう。ただそれにしても、男から流れ出る汗は暑さのせいだけだとは思えなかった。

明らかに自分の存在で怯えていることに、少女は少しの申し訳なさを感じる。けれど、それでもやはり少女の体は変わらず進んでいく。それはたとえ男がゆっくり歩こうが、速足になろうが変わらない。一定の距離を保ちながら、わざとらしく音を立てながら、ただひたすらに歩いていく。

そして男と少女のどちらにも不幸なことに、進んでいく道の先は闇に包まれ見る事が叶わない。その左右ですらも、木々がひたすらに立ち並ぶだけ。本当に自分たちが出口へ向かっているのかどうかさえ、彼らに分かる確かな術はなかった。

少女が視線を上にあげることで、瞳の中に飛び込んでくる景色は間違いなくいい。現実の世界も含め、今まで少女が見た中で五指に入るほどの絶景だろう。

ただ終わりのない夢と、意識しなければ常に見続ける事となる男の背中。それらに少女が、徐々に不安に思ってきたのもたしか。けれど都合のいいことに、男が急に立ち止まり少女もそれに合わせて止まる。そうしたこともまた、少女がそんな風に考えていたころだった。

今までにない展開であり、やっとこの夢も覚めるのだろうか。そう少女が思ってしまうのも無理はない。そのためそんな期待をのせながら、少女は男の背中をみやる。

だが男は中々振り向こうとはしない。いや、実際に振り向こうとはしている。してはいるのだが、やはり不気味に思うところがあるのだろう。男の首は錆び付いた鉄のよう

にギリギリと遅く、もう少しと思えばまた戻りもしている。
本当なら少女から声をかける事ができればいいのだが、男を見つけたときから動くのは視線のみ。そのため仕方ないと言えば仕方ないのだが、まるで少女は妖怪のような扱いになってしまっている。
そんな現状に少女は少しばかりの遺憾の意を持ちながら、それでもなお根気よく待ち続けて暫く。そうした後、ようやく男に決心がついたようだ。
男は一度首を戻して真正面を向き、大きく一息をつく。そのお蔭なのかどうか、心なしか震えていた体が収まったような気もする。
そして、そのままゆっくりと首を動かし――。

振り向いた。

男の顔がすさまじい速さで変わっていく。始めはやはり怖かったのか青ざめており、次いで驚き、最後には心底ホッとしたような顔に。
男が怯えていたのはわざとではないが少女のせいであり、それは少女自身も自覚している。そのため男の震えが止まり、安心したような顔になるのは少女にとって間違いなく良いことだ。ただ、それに気になることがないわけでもない。

少女はてっきり、やっていたことがイタズラだと思われて怒られる。もしくは映画の予告編よろしく、男が振り向いたところでキリよくこの夢が終わるものかと思っていた。ただどういうわけか、夢が終わる気配は全くこれっぽっちもない。

さらにいえば少女の背丈は男よりも少し低い程度であるのにも関わらず、どうやら男には少女の姿が見えていない。まるで少女が、本当に妖怪扱いされているようであった。

男はやはり見えてはいないようで、そんな少女の考えなどお構いなし。心の底から安心した様子で元の道を歩こうとする。

対して少女は、そんな男の行動に若干ふてくされる。妖怪扱いされて喜ぶ者もそうはいないだろう。むしろこうなればとことん付き合おう——そう思いながらも、また夢が覚めるときを待とうと先ほど同様歩き出す。

いや、『少女』は歩こうとしていなかった。少女が歩くのだと勘違いし、先ほど同様勝手に行われたその動作。それは、ただ一歩を踏み出したに過ぎなかった。

ただ、勢いをつけるためだけに。少女の意思に反して突き出された右腕を、しっかりと目の前の男の背に突き刺す為だけに過ぎなかった。

瞬間、少女の目の前が赤一色に染まる。

そして色の出どころである男の背から『少女』は右腕を引き抜き、男はその身から色

を滴らせながら、ゆっくりと地面に吸い込まれていくかのように倒れていく。
少女はいきなりの出来事に何がどうなったのか理解できない。それでも、先ほどまで怯えながらも動いていた筈の男の手足が止まったところ。男の着物が穴の開いた背のあたりを中心に真っ赤に染まっていくところ。それらを見下ろすうちに、男が目の前で死んだという現実が、夢の中のくせに嫌でも実感していく。
もし少女に体の主導権があったならば、その時は耐えきれない現実を前に人目を気にせず吐いていただろう。けれど『少女』は吐くどころか、遂には目の前のそれらから視線を外すことすら許してくれない。
徐々に体温を失っていく男から。視界の端に見える、男の着物と同じくらい真っ赤に染まり、今は体の横に垂らされた右手から。
まるで、少女に見せつけるかのように。
しばらくの時間が経とうと、少女の体が動くことはない。けれどその動くことが出来ない間に、多少なりとも心を落ち着かせることは何とかできていた。
ただいくら夢とはいえとても鮮明に、目の前で、それも少女自身が殺したのだ。そうだというのに、今まで人の死体すら見た事のない少女が半時も経たず心を落ち着かせる。普通にしては、いささか早すぎはしないだろうか。
だからこそ次に、少女は心の底から不安を覚える。果たして自分という人間は、これ

ほど冷徹に物事を捉えることのできるような人間だったのだろうか。人の死を目の当たりに、数分もかからず心を落ち着かせることができるほど器用な人間だったのだろうか。

それをしょせん夢の話だと割り切ることは出来ない。夢のような心地にも関わらず、どこまでもリアルなこの夢。それはさながら、誰かの記憶を覗いているかのように鮮明に過ぎた。

そして状況に反してやけに冷静な少女がそこまで思い至ったとき、何の前触れもなく、急に少女から『ナニカ』が抜け出て行った。目には見えない、音もたてない。ただそこに在ることのみ感じることのできる『ナニカ』が。

恐らく抜け出たという感覚さえなければ、現在の少女の心境からして知覚すらできなかっただろう。けれどそれは、先ほどの出来事が心の片隅にすら置いておけないほど。それほどの圧迫感を放ちながら、ただ少女の目の前で佇んでいた。

少女は、怯える。理由は分からない。けれどそんな理由など、最早どうだっていいほどのものをその『ナニカ』から感じていた。

今まで出会ったことのない、先ほどの出来事とはまた違う別種の恐怖。生物としての本能的なものといってもいいかもしれない。『ナニカ』は少女にとって、無意識にそう感じさせてしまうほどの存在だった。

そして恐らく少女に認識してもらう為に、敢えてそんな矛盾した在り方をしている『ナニカ』。ただそれは少女に対して、今まで感じたことがないほどの恐怖を与えるだけに過ぎない。

そんな『ナニカ』は不意に少女に対して何を思ったか、未だに動くことすら出来ず恐怖におびえている少女に語り掛ける。

『――――』

けれど、その言葉が少女に届くことはない。ただ何処かへと浮かび上がるような感覚が、待ち望んでいた夢の終わりをようやっと少女に告げていた。

味気なく広がる、先ほどとは違う白。それが夢から覚めた少女へと、真っ先に飛び込んできた色だった。

「知らない、天井だ」

あの悪夢を見た後での少女の第一声。たとえ今目が覚めたという感覚から本当に夢だと気づいたのだとしても、中々言える事ではないだろう。もしかしたら案外肝が据わっているのかもしれない。

少女は天井と同じく、真っ白な清潔感のあるベッドに横たわっている。ただその心地

などから、少女の部屋に備え付けられている物とは違っていた。

そこで何故か少し気だるい上体を起こして周りを見渡せば、見えたのはまた変わらない白。ただよくあるような、神様が待ち構えている不思議空間ではないらしい。白は所々で波打ったようにうねっており、そこらに繋ぎ目も見てとれる。どうやら少女は白い布、カーテンで周りを覆われているらしかった。

そこから徐々に寝起きから動いてきた頭で考えれば、薬品などの匂いからもここは病院のよう。動きづらいと思っていれば案の状、右手には刺さっている点的。傍らにある机の上には、これまた定番のフルーツ盛り合わせが置かれている。

「ベッドから落ちて頭でも打っ――!?」

少女が自身の考えを確かめようと、おもむろに頭へと手を置けば突き刺さる強烈な痛み。さながら針を突き刺したようなそれは、暫く少女が悶絶するには十分すぎるほどのもの。

その後悶絶から立ち直った少女が思うに、頭の怪我は考えていたよりも深いらしい。一瞬だけれど触った感覚から、ご丁寧に包帯が何重にも巻かれているのが分かった。

自覚したからか、それとも触ってしまったからか。さらに痛みだした頭に音を上げて上体を戻す。加えてまた初めの状態、ベッドに横たわる形になった際にナースコールを見つけた少女はためらうことなく押した。そして今の状態について思いを巡らせるも、

明確な答えが定まる以前に終わってしまう。

何故なら少女がナースコールを押し、今の状態を考え始めてから暫くも経っていない頃。遠くから走るような音が響き、近くで止まったと思えば勢いよく扉が開かれる音がカーテンの直ぐ向こう側で聞こえたのだ。

少女は内心で病院なのに――と呆れつつ、自身の現状を把握できることに喜ぶ。そしてまた勢いよく、少女のベッドを覆うカーテンが開かれた。

「起きたのか!?」

まず初めに、大きな声をあげながら少女の前に現れたのは男性。黒髪を短く切りそろえており、整った顔立ちに高い身長といったいかにもな好青年。

顔のパーツから普段は人の良さそうな顔をしているのだろうが、今は必死の表情で焦っているような、心配そうな表情になっている。

「大丈、夫……？」

次にどもりながら、けれど先ほどの男性を押しのけながらも少女の前に現れたのは女性。綺麗で艶めいた黒髪を腰辺りまで伸ばし、いわゆるモデル体型というやつなのだろう。服越しにも分かる体の曲線は相当なものだ。

男性の方とは違い、マスクをしているため顔や表情こそ分かりづらい。だが目じりに浮かぶ雫から、とても心配そうにしていることが分かる。

その二人はどちらも相当心配してくれているようで、痛くはないか、寝てなくていいの――と、口々に少女へ向かって声をかける。そのように心配されている少女は、怪我人として素直に嬉しく思う。――そう、確かに少女は嬉しく思うのだが。

「あの……どなた、ですか？」

少女はその心配してくる二人を、どちらも知ってはいなかった。故に、少女の口から出されたのは純粋な疑問。

自分は彼らのことを知らない。けれど少女の顔を見て言葉をかけてくるという事は、見間違いなどではなく彼らは少女のことを知っているという事。ならば失礼に当たるかもしれないが、少女がつっかえながらも尋ねるのは自然と言える。

「「ッ……」」

ただそれはあくまだ少女だけの考え。心配してくれていた二人は息を？み、今にも泣きそうな、悲痛な表情を浮かべた。

「あ、その……すいません」

少女は勿論、心配してくれた二人にそんな顔をさせるつもりはなかった。というよりは、まさか名前を聞いただけでそんな表情を浮かべられるとは思いもよらなかった。そのため何故――と不思議に思いながらも急いで謝るも、二人の表情は沈み込むばかり。

「彼女が目を覚ましたというのは本当ですか!?」

そして墓穴を掘るばかりでどうしようもなかったからだろうか。また慌てるようにして入って来た病院の先生と看護師を視界に入れるなり、少女は思わずといったように安堵の表情を浮かべる。

対して先に来ていた二人は来たばかりの扉前にいる先生に詰め寄ると、頻りに少女の様子を窺いながらも話し出した。

少女は何を話してるのか――と、気になりながらもとりあえずは空気を読んで大人しくする。すると暫くもしない内に、先生が一人少女の前へと進み出た。逆に先に来ていた男女は動かず、扉前で看護師と一緒にことの成り行きを見守っている。

そして医師は少女が横たわる方へ寄り、落ち着いたのはベッド脇。何処からか椅子を取り出して座り、少女へと語り掛けるように話し始めた。

「やあ、初めまして。少しおじさんの質問に答えてもらっていいかな？」

目線を少女に合わせ、話し出した口調はとても穏やかに。所々に白髪が混じった髪の毛に、しわが入りながらも浮かべる笑顔などはまるで近所のお爺ちゃんのようだった。

そんな医師に少女は気持ちを落ち着かせる。夢の時ほどうろたえていた訳ではないのだが、それでも心無い自分の言葉で人を傷つけたかもしれなかった。そんな折にかけられた優しい言葉は少女の心に染み渡る。

「……はい」

ただ、歳の割に小柄なのを気にしてるのに――と、少し納得いかないながらも少女の返事を受けた医師の質問は重ねられていく。そうして質問が重ねられる度、段々と少女は何かおかしいと気づき始める。

質問の内容は少女の家族から年齢、生年月日、住所といったもの。途中怪我の具合も聞かれたが、それは少女が痛みに顔をしかめた時のみ。はじめから聞こうとしていた質問とは関係ないようだった。

現在の体の状態や自身の身に何があったのかを知りたい少女にとって、それらの質問には一見なんの意味もない。

けれど、遂には最後の質問を前に冷や汗をかき目に見えて焦り出す。先ほどまで冷静に考えていた少女の心の内だけにとどまらない。きっとそれは医師や扉前で様子を見ていた男女、看護師にまで分かるほどに目に見えていた。

「それじゃあ、これが最後の質問だ」

「……は、い」

ただそれもそのはずだった。

「君の名前は、何だい？」

何故なら少女は――。

「わか、りません……」

医師の出した質問に、何一つ答える事が出来なかったのだから。

遂に先に来ていた男女の内、女性の方は声をあげて泣き出した。そしてその女性を支えようと看護師や男性が慌てて動くも、先ほどまで気にかけていた少女が反応することは一切ない。

扉前の騒動にも、自身の名前すら答える事ができない事実にも、少女の体は一切反応せず動かない。ただ、その心は違う。自分が一体何なのか、何故か決して出てくる事のない答えを前に、一人意識の底で自問自答を続ける。

そして答えは、存外はやく出た。

「……先生、私からも質問していいですか」

「もちろんだとも」

最後の質問から少女が再び口を開くまで、少しも動くことなく待っていた医師は少女の問いに快く返事をする。

慣れているのか、それとも医師として己の役目だと認識しているのか。表情は硬くとも、結局自身では答えを出すことが出来なかった少女の為。そのために、自身が代わりに答えを出すことを引き受けた。

「わたしは、誰ですか」

家長カナ

少女は青ざめた顔をしている茶髪の女の子(自身)を幻視しながら、また意識が何処かへ遠のいていくのを感じた。

一話

夜の暗闇を照らし立ち、多くの羽虫が引き寄せられるように群がる街灯。作られたばかりなのか汚れ一つなく、街灯の明かりが届かない場所で映える真っ白なガードレール。

バイクの後部座席から見るそれらの景色は、まばたきの合間に遥か後方へと凄まじい速さで流れてゆく。勢いはさながらビデオの早回しのようで、少なくとも法定速度を守る気がないのがよく分かる。

「んっ」

不意に通りを曲がった際、少女は体が遠心力で外へと引っ張られるのを感じた。

ただそのままみすみす落ちる筈もなく、前の席に座っている女性のお腹へと回していた腕に、少しの力をこめる。

「カナどうした、の？」

するとその女性から、少しどもりながらも騒音の中で声が僅かに漏れてくる。バイクを運転しているため後ろこそ見ることができない。だがカナと呼ぶ少女が、何か自身に伝えたいことがあるとでも思ったのだろう。

「……ううん、なんでもないよ」

けれどカナはバイクから落ちることのないよう、自身の身を守ろうとしただけであり、現在女性に伝えたいことなどはない。

そのためカナの思った通り、自身の返事を女性へとかえした。返事を返すまでに少し間が空き、詰まってしまったが、それも特に意味はない。ただ甘えていると思われていたかと思うと恥ずかしく、単純にどう答えればよいのか迷っただけにすぎない。

「……もうすぐ、着く。無理はしない、でね」

その声はエンジン音などで確かに聞こえ辛く、やはり顔すらも見ることができなかったが、カナには確かに慈しみの念が感じられた。

とはいえ相手は、夜の電車は危ないから――と。わざわざ中学生の肝試しに家からバイクで送ってくれるような女性。カナはそんな女性からの言葉に感謝を覚えるよりも早く、相変わらずだなと苦笑いを浮かべてしまう。そして苦笑いを浮かべたあと、相変わらずと感じるほどこの女性と過ごした自分に気付き、不意に心の内で思い返す。

それはカナ自身似合わないと自覚しながらも感慨深げにさせるもの。ついこの間中学生となった現在からおよそ四年前、カナが病院で目覚め、次いですぐに気絶した時のことだ。

カナは四年前のその日、自身が持つ八年もの思い出を失っていた。

原因は当時乗っていた通学バスがトンネルの崩落で生き埋めになった事件。救出時こそ奇跡的にほぼ外傷のなかった彼女だが、その際にもろくなったのか再び崩れた二次災害に遭って頭を強打した。

今でこそ気のいい友人たちにも恵まれ、新しく中学生となって快適な学園生活を送っている。だが当時のカナは医師から頭を強打したことによる記憶喪失、及びそれに伴って精神的に酷い混乱状態にあるとまで言われていた。

そんな状態から立ち直ることが出来たのは、心配してくれた当時の担任に担当の医師たち。そしてなによりも家族によるものが大きい。

例えば、今現在カナの目の前にいる女性。四年前の病院にもいた彼女の名前は家長菊乃（きくの）。目覚めた当初は何故か従姉かと勘違いしていた彼女は、何を隠そうカナの姉に当たる人物。

他にも生まれた順に、長期の出張に行っているそうでカナ自身はまだ会えていない長女。菊乃と同じく病院で出会い、従兄かと勘違いした長男。そして次女の菊乃。

彼らは自身も職に就いているに関わらず記憶を失ったカナをそれはもう心配し、入院中は毎日お見舞い、退院後も長女を除いた今も三人で暮らす家で甲斐甲斐しく世話を焼いた。長女は手が離せないらしかったものの、今でも何日かに一回の割合で手紙を送っている。

そしてそのかいあってか、カナは肉体的にも精神的にも回復し、今の生活を送っている。

菊乃達はそれをカナ自身の強さによるものだと言っているが、カナはそうは思わない。カナは自身を彼らが思うほど強くないのは知っている。ただそれでも強く見えるとするならば、それはきっと家族を思うからこそ現れる強さだろう――と。

カナは、それほど彼らを信頼している。それはそう、無事中学の入学が決まった際には赤面しながら先ほどの言葉を感謝と共に述べるほど。

もちろんその言葉を一言一句録音しながら聞いていた菊乃達は号泣した。そして何故かそれを見てカナまでも泣き出し、何年かぶりの川の字寝をしたという。だがそんな彼らにも――彼らにこそ言えない秘密がカナにはある。

カナは先ほどとは違い、今度はどこか哀愁を帯びた表情で思い浮かべた。それはとある物語、医療目的ということで今でもたまに通う医師にのみ告げたことのある話。

カナはおよそ八年に及ぶ記憶を事件によって失った。実際には、事件後初めて起きたときも記憶があやふやになっているため正確とは良いがたいが、あながち間違いでもない。ただカナには何故か失った八年間の記憶の代わりに、ある物語が知識として残っていた。

『ぬらりひょんの孫』

四分の一のみ妖怪の血が流れている主人公が、仲間と共に多くの敵を打ち倒す物語。
挫折しかけたときもあった。
力のなさに涙したときもあった。
進むべき足を止めてしまうときもあった。
けれど仲間に支えられ、同じように仲間を支えた主人公たちの活躍により、最後には大団円を迎えた物語。
カナは唯一残っていたそれを不思議に思ったが、同時にその物語を素直に良いと感じた。恐らく漫画か何かだろうそれは、起きる直前に見た悪夢を含めて家族や医師にわざわざ伝えるほどでもないが、面白い物語だと。何故か四年経つ現在でも色あせることなく残るそれは、入院時一人の時の暇つぶしにも丁度良かった。
ただそれだけならよかったのだ。失った八年間の間のどこかで知り、たまたま残った記憶ならよかった。けれど初めは偶然だと思っていたそれは、時を重ねるごとにむしろ違和感を煽り立てていった。
そのきっかけはほんの些細な事。まだ復学したばかりで周りとの距離をつかみかねていたカナへ、暇つぶしにと担任から教えられたもの。いわゆる、夢小説とも呼ばれるサブカルチャー。そしての中には、自身の名前を置き換えて読むことができる物があるという。

だが当初カナは、物語に登場するヒロインの一人が自身と名前も容姿も同じだったとしても気にしていなかった。精々失った八年の『家長カナ(記憶)』は、頭を強打した際にヒロインを自身と置き換えてしまうほどこの物語に入れ込んでいたんだなという程度。

実際それ自体も中々の発想なのだが、カナ本人は自身の好きな物語に一人の登場人物として生きていることにファンとして嬉しく思ってしまっていた。

そのため物語の『家長カナ(ヒロイン)』の友人たちと現実で知り合うまでは、その異常性に気づくことが出来なかった。

自身だけならばまだ、大負けに負けてよっぽどのファンだったのだろうと許せる。ただ知り合う前の自身の同級生までも登場してくるのは流石に見逃すことはできない。

けれどようやく気付くことのできた当時は、既に家族に散々迷惑をかけていた頃。職もある家族には迷惑かけまいと、ネットなどの小学生一人で行える範囲内で調べることにしたのだが、結果は黒。

『ぬらりひょんの孫』などという物語は、世間のどこにも出回っていなかった。

ここまでくれば流石にカナ一人では手に負えない。だが医師にこそ相談したものの、カナはそこまで気にしてはいなかった。それこそこれが小説の話ならばやれ原作知識だ、などとなるだろうがここは現実。それも物語というのは戦いがメインで主人公自身もそうだが、戦うのは殆ど人ではなく妖怪だ。

文明開化極まるこの現代に、もはや絵本でも中々見かけない妖怪などいやしない。実際にテレビなどで見かけることもあるが、そんな妖怪を退治するという陰陽師も嘘くさい。

だからカナは、こう語順る。

「迎えはまた呼んで、ね……？」

「ありがとうキク姉！　じゃあ行ってくるね！」

ここが物語の世界など、ありえない――と。

場所は道路を挟んだ旧校舎の向かい側にある空き地。普段人の気配を感じられないそこは、今晩に限ってはカナの友人と思わしき人の影がある。

「やっほー、みんな今日の学校ぶりだね」

夜中にも関わらず大きな声を上げてはいるが、幸いにも、ここは空き地といっても中学のグランドと藻が溜まり整備が行き届いていない池に挟まれたような場所。

夜中でもあるため、カナたちのように肝試しでもしようという者が他にいなければそれを咎める者もいないだろう。

「よく来てくれた家長君！　さあ今晩こそ、僕たちが探し求めるあの方について存分に探究しようではないか！」
「はは……お疲れっすね家長さん」
　来て早々声をかけたカナに返事を返すのは二人。先に勢いよく返したのはこの肝試しを企画し、カナたちを誘った清十字（きよじゅうじ）　清嗣（きよつぐ）。そして清嗣とは違い、テンションの高い清嗣に絡まれているカナに少々の同情の念をもって返したのは島（しま）　二郎（じろう）。
　返す際の楽し気な口調などからも分かる通り、どちらもカナの友人。小学生時代からのの友人であり、休みの日に何度も地方を訪れて心霊スポットを回るほどの仲といえば分かりやすいだろう。
「あ、そういえば今日の女子私以外来れなくなったって」
「なに、またかい!?　全く、彼らには清十字怪奇探偵団としての誇りが感じられないな……」
　カナが思い出したように今晩参加する予定であった二人が欠席すると伝えれば、言葉とは裏腹に目に見えて落ち込む清嗣。
　それは何も参加する女子が減ったため、というわけではない。尊大に聞こえる口調とは裏腹に友人思いな清嗣。恐らく一緒に肝試しができないことを純粋に悲しんでいるのだろう。

「そ、そんなことないっすよ清嗣くん。あの二人はなにかと忙しいっすから、そうっすよね家長さん！」
「へ？　いや、別にそんなこと言って……うん、言ってた。すごい言ってたよ清嗣くん。来れないのすごく残念そうにしてた」
　またもや失言をしでかすところを二郎からのアイコンタクトによって強制的に意見が捻じ曲がるカナ。それはもはや睨み付けているといってもいい領域なのだが、こうでもしないとまた余計に場を乱すので正解ではある。
「ふ、ふーん。そんなことを言っていたのか……ならば仕方ないな！　彼女たちの分まで今晩は大いに張り切ろうではないか！」
　素直に嬉しがらない清嗣を前に、カナと二郎の心がとある感情として一致する。それを清嗣が聞けば憤慨しただろうが、そこは言わぬが花というもの。清嗣が喜んでいるのは間違いないのだから構わないだろう。
　それでも実際、二人が来ないのは用事があるから。さらに怖いものが苦手な二人だが、それでも小学生のときに結成して以来、やめる素振りがないのを見るにそういうことなのだろう。
「おや？　ようやく名誉隊員のお出ましだよ」
　不意に話の中、清嗣が話を切って視線をある方向へと向ける。先にあるのはフェンス

で仕切られている、カナたちも空き地に入る際に使った出口。
清嗣だけでなく二郎やカナもそちらをみれば、清嗣のいう通りでこちらへと駆け足で向かってくる少年が一人。特徴と言えば茶髪に眼鏡をかけているぐらいだろうか、少し幼くも見えるが見た目はそこらにいる中学生。十人が見れば、ショタ趣味が混じっていなければそのまま通り過ぎるような少年だ。
けれどカナは無意識のうちに、自身の背筋が伸びるのを感じた。
「遅いではないか奴良君！　君はそれでも名誉会員としての自覚があるのかい？」
「ごめん、ちょっと家でひと悶着あってさ」
「ああ……確かにリクオの家って見た目からして厳しそうだしな」
少年、奴良リクオが真っすぐ三人が集まっていた所まで来るとカナを除いて思い思いに話し出す。清嗣の口調はやはりきつく聞こえるが、小学生時代からの友人ということもあり慣れているのだろう。明るい笑顔を浮かべながら話だし、二郎もそれに乗る。
それをカナは、一歩引いた立ち位置で眺めていた。らしくないことは自身でも分かっている。けれど丁度ここに来る途中で昔を思い返していたからだろうか、カナは目の前の光景が自身とは別の世界のように見えた。
「あれ……カナちゃん、どうしたの？」
リクオが来てから喋らずに黙り込んでいたカナを不思議に思ったのだろう。言葉を

かけてきたリクオだけでなく、清嗣や二郎までもが不思議そうにカナを見つめる。
　確かにらしくないとは感じていたが、まさかそんな風に言葉をかけられるとは思わずカナは目を丸くする。そして若干居心地が悪くなってきたところで、不意に視界の端に人影を見つけた。
「えっと、ただ……あの人たち誰なのかなって」
「あ、ほんとっすね」
「全く気づかなかったな。誰かの知り合いかい？」
　そう言いながらこそこそと出口の方を指させば、いつから来ていたのか男女が二人。片方は髪をオールバックにした大柄な体格の男で、もう片方はどこか不思議な空気を纏っているかのように見える可愛らしい女の子。
　苦し紛れに言い放ったに過ぎないそれ。だがどうやら場を乗り切るには十分だったようで、すぐに話題が移ろうとしていた。
「あっ!?」
　ただリクオには心当たりがあったようで、思い出したと言わんばかりの声を上げて出口へ走り出す。今度はカナですらも不思議そうにリクオを見ていたが、すぐに三人でこちらへ向かうのを見る限り、やはりリクオの知り合いであったらしい。
「この子たちうちの従兄妹なんだ。先生がこれないなら代わりに連れてけって家の人が

うるさくて」
「及川氷麗(おいかわつらら)です！」
「倉田(くらた)だ」
慌てた様子のリクオが二人を連れてきたと思えばどうやらリクオの従兄妹のようで、女の子の氷麗はハキハキと、男の方は不愛想ながらも自己紹介をする。
二人の自己紹介に対する反応は様々。清嗣は純粋にメンバーが増えたことにより喜びを、二郎は可愛い氷麗を見て喜びながらも照れている。そしてカナはというと表面上はにこやかに、けれど内面では心の内を悟られないように表情筋に全力を振り絞っていた。
何故ならあくまで物語の中の話だが、目の前で談笑するカナの次にきたリクオ。そしてあとから来た少年の従兄妹という男女。彼らはただの人間ではなく、そもそも人間ですらない妖怪なのだ。
立ち位置で言えば主人公とその側近。流れや振る舞いからも分かる通り、リクオが主人公で後から来た氷麗と倉田は側近。
それも側近の二人は現在かりそめの姿であり、本来の姿は雪女に青田坊という妖怪。それも雪女である、本名をつららに関して言えば、彼女はカナと同じく三人いるヒロインの内の一人であり正ヒロイン。

カナは四年という年月を幼馴染として付き合って来たため、いくら主人公とはいえリクオを見ても感情がそこまで揺れることはない。けれど先ほどのように清嗣たちと絡んでいる姿、今のようにつららや青田坊と絡んでいる姿を見れば、もしかしてと考えてしまう。

だがカナは決してそれを認めない。たとえ先ほど同様、自身だけが別の世界にいるかのような錯覚に陥ったとしても――認めてしまえば、何かが壊れる予感がして。

「それじゃあ人数もそろったし、そろそろ行こうか」

「……っ！」

カナはまたしても思考の海に浸かってしまっていたところを清嗣の言葉に現実へと戻されながら、それを周りに悟られないよう自身を引き締める。

けれど各々で話し続けていたからだろうか、先ほどとは違ってカナの様子に気づいた者はいない。それを確認すると、カナはホッと一息をついて清嗣の話に耳を傾けた。

清嗣の話は旧校舎へ向かうまでのルートについて。旧校舎への道は道路で切り離させているため、現在カナたちがいる空き地から登ってその道路を直接渡り切るとのこと。

実際にカナたちが向かうと、夜遅い時間ということもあったのだろう。リクオはその性格からか少しためらいはあったものの、交通量も少なく全員無事に渡り切ることがで

きた。
「うわあ……不気味っすね」
「道路を渡らないともう来れないからね。管理が杜撰になるのも仕方ないさ」
道路を横切り、そこから月明りすら差し込むことのない林の中を少し歩くと見えてくる。
外から見た限り台風でも来たせいか窓は全て割られており、建てられた当初は白く塗られていただろう壁は泥やシミで薄汚れている。二郎や清嗣が言った通り不気味さは十分、管理などまともに行われているわけがない。
「でもこの前行ったところの方が雰囲気出てなかった？」
「あそこは殺人があったていう前情報があったからじゃないっすか？」
「僕には君たちが雰囲気を壊しているように思えるけどね……」
それでもこういった場所はこの場にいる全員が慣れてはいる。確かに見た目から可愛いなどとは口が裂けても言うことはないが、先ほどまで静かだったカナがふざける程度には問題ない。
清嗣が青筋を立てているのを他所に、メンバーが次々と鍵の壊れていた扉から旧校舎の中へと入っていく。外を見ていたため大体の見当はついていたが、やはり中も相当荒れていた。

廊下わきにある水道付近からは時折蛇口から滴が落ちる音が聞こえ、抜けた床の暗闇の先はなにも見えない。これならば何時、何処から妖怪が飛び出してきても不思議ではないと思わせるぐらいには酷い有様だ。

暗い廊下を家から用意してきたライトを頼りに歩くカナは、先ほどもふざけていた通り怖いものにはある程度の耐性がある。それは小学校時代からの慣れ。他にも本人にこそ自覚はないが、もし物語のように妖怪が出てきたとしても、主人公であるリクオが近くにいる限り安心だと考えているからだ。

そのため、今まで清十字怪奇探偵団の集まりで心霊スポットを歩くときはリクオと談笑しながらが殆どだった。今回も恐らくそのようになるだろう、という漠然とした思いがあったのも確かだ。

けれどどうしてだろうか、今回に限ってはそうはならなかった。

「えっと、倉田くんだっけ……どうしたの？」

「……なんでもねえよ」

物語の通り、リクオは旧校舎に入ってしばらくすると何やらいつもより張り切って調査をし始めた。もちろん清嗣はそんなリクオを見てやっと名誉隊員としての誇りが――などと言いながら嬉しそうに追いかけていき、二郎もそれに続いた。

そんなちょっとしたコントのような物を見ていたカナだが、いくら耐性があるといっ

てもこんな場所で一人きりというのは流石にない。そこで先に行ったリクオたちにちょっとした悪態をつきながらも追いかけようとしたところ、何故か真っすぐ倉田、もとい青田坊がカナのところへと来たのだ。

青田坊の突然の奇行に驚いているうちに、既に清嗣たちはその背中が見えなくなるほど先へと行ってしまった。さらに何気なく辺りを見渡せば、何時の間にやら青田坊といたはずのつららもいなくなり、文字通りカナと青田坊の二人きり。

カナは何も青田坊が嫌いなわけではない。むしろ物語上ではその妖怪としての成り立ちなども含めて思わず憧れすら感じるほど。ただ、だからと言ってこの何とも言えぬ空気が変わるわけもなく、ずっとこのままでいいというわけでもない。むしろ普通に気まずかった。

運動神経は明らかに良いだろうし、いっそ青田坊を置いて行ってしまえば追いかけてくるとも考えるが、それはどうも違う気がした。何故なら今カナたちは何を喋るでもなく真横に並び、ゆっくりとリクオたちを追っている。カナと青田坊ではその体格差が圧倒的に違うにも関わらず、ゆっくりと真横を歩き続けているのだ。青田坊の方が意識して合わせなければ、まずそうはならないだろう。

「ね、ねえ倉田くんは――――」

そのことに気づいたカナは、もしかすれば気を使われているのだろうか、と。せめて

場を和ますために口から出した言葉は、最後まで続くことがなかった。
それはカナが青田坊に話すのを途中で止め、その場を全力で駆け出したため。ただ青田坊から逃げ出そうと思ったわけではない。むしろ今カナの頭の中には、青田坊のことを気にする余裕など欠片もなかった。
何故ならば遠く向こうで、清嗣や島の叫び声が聞こえたのだ。
必死に床に空いた穴を避けながら、暗くて先の見えない前をライトで照らして廊下を走る。
ライトが走っている途中で思わず手から離れてしまった。カナの後ろから何か物が落ちたような音が聞こえる。床はもう割れた窓から差し込める月明りによってしか見ることができない。
見過ごした穴の空いた床に足が一瞬取られた。それでも踏ん張り、こけたときはその都度立ち上がりながらひたすら走り抜ける。
もし叫び声の原因がカナが考えるものと相違なければ、カナにやれることなど何一つない。ただそういう問題ではなかった。かといって、気づいたら体が動いていたような英雄精神溢れる行動でもなかった。
ただ他の誰を差し置いても、自身だけはその場にいなくてはならない。そんな、半ば強迫観念のような思いだけがカナ頭の中を満たしていた。そしてそんなカナが目指す

先はただ一つ、記憶にも残る物語上で今晩妖怪が出る教室。
普段は滅多にしない急な運動に息切れをしながらも目的地にたどり着いたカナは、その教室の中を見て思わず息をのんだ。
倒れている清嗣と二郎、その二人をかばうように前で立つリクオ。三人は格好や状態こそおかしいが、それでも普段から見慣れている。
問題はカナが入ってきた扉から見て奥にある部屋の隅。近くの割れた窓ガラスが散らばり、気絶した二人の内どちらかが落としたであろうライトとわずかな月明りによって暗闇から薄っすらとみえる場所。
そこには大人一人程度の大きさをした人型の黒い影があった。だが決してただの人影ではない。それは文字通りの影。わずかとはいえ照らされている足元は、けれどどこか脈打つように動くもひたすらに黒一色。
見た限り、間違いなく人間ではない。カナは今まで見たことのない歪な存在に言葉を失い、走ったことで火照った体が急速に冷えていくのを感じる。
カナの中ではあくまで物語の一部でしかなかったそれは、けれど形や知識だけなら少しは知っていた分、むしろ驚くほど強烈に恐怖を頭にしみこませていく。
すると不意にカナは、その影と目が合った気がした。
元より目どころか口や鼻などのパーツも見当たらぬそれに、何故だかそう思った。け

れど次の瞬間それが気のせいでないことがよくわかった。
開いた。
一つや二つだけでなく、おびただしい数の瞳が影の至る所で見開いた。
複眼といえばいいのだろうか。開いた目の中には黒目はなく、一つの目の中にいくつものガラス玉のような白目が蠢いている。
それらがたった一人、リクオや気絶している清嗣たちにも目をくれず、生理的嫌悪感に今にも吐きそうなカナだけを見つめていた。カナは恐怖に頭を支配されている中、それでも確かに理解する。
今自身がいる世界は、物語の世界ではない。
今自身がいる世界は、普通の世界ではない。
今までは、見つけられなかっただけなのだ。

今までは、幸運だったのだ――と。

二話

清潔感が連想される、白一色で床や壁が統一されたその部屋。家具は一つの卓上テーブルを挟むよう置かれた二人掛けのソファ。あとは、わきの棚とそこに申し訳程度に置かれた本が数冊といった程度に少ない。

カーテンの隙間から漏れる光は壁と同じく、一面の白い床によく映える夕焼け色。その光が目に入るのか、カナは時折目を細ませる。そしてそんなカナは目の前の白衣を着こみ眼鏡をはめた老医師とテーブルを挟み、ソファに自身の体重をかけていた。

「ほお！　じゃあ本当に妖怪がいたというわけだ」

髪の殆どが白く染まっており、しわの深い老人がよりそのしわを深ませながら笑みを作る。好々爺のように茶目っ気をふんだんに含めたその言い方は、恐らく意図して喋っているのだろう。表情こそ孫と話すかのごとく笑顔だが、目の奥に少々のいたずら心が見て取れる。

「……残念でしたね山本（やまもと）先生、全く違いますよ」

カナは目の前、山本と呼ばれる老医師とは既に四年の付き合いになる。そのため自身がからかわれていることに早くも気づき、心の底から呆れたように返事を返す。

山本はその返し方につまらなさそうに唇を尖らせるが、カナ相手では取り付く島もない。特に今は普段よりも機嫌が悪いらしく、ツンとした素振りを見せながら昨晩起こったことの顛末を語る。

昨晩起こったこと。それは中学の旧校舎で行った肝試し。そしてその最後に見ることとなった恐ろしい存在のこと。

あえて旧校舎で起こった結末のみに関していうならば、清嗣、二郎、そしてたどり着いたはいいものの結局なにをすることもなかったカナの三名が気絶。そしてリクオ、つらら、青田坊は無傷、むしろカナたちを旧校舎から外へと運び出す程度には余裕があった。

その当時のことを、気絶していたカナは知らない筈だ。なら何故知っているか。簡単な話、当時起きていた者に聞いたため。

それは高身長で黒髪短髪に端正な顔立ち。見た目大学生ほどの、近所でも好青年と評判されるカナの兄。家長家（けっき）の長男にあたる——家長幸希（こうき）によってだ。

カナは旧校舎から気絶したまま幸希によって家へと運ばれた。

そして起きたのは家についてから数十分した辺り。気づけば旧校舎の薄汚れた食堂ではなく、自身の部屋のベッドに寝かされていたカナはそれはもう驚いた。そして次にあの恐ろしい影のような存在を思い出し、恐怖に体を震わせようとしたところであるこ

とに気づき、また別の意味で再び驚いた。
ベッドの脇、普段は小さなテーブルが置かれているところに見知った顔の人物が二人。それはカナの家族、幸希と菊乃。いくらカナの寝室といえど二人は家族。流石に寝顔を見られるのは恥ずかしいが、見られて困る物を置いているわけでもなし。いくらでも入ってきてもらって構わない。
ならば何故カナが驚いたか。それはカナの家族である二人が、何故か気まずげな顔でカナの方を向きながら正座していたからである。
カナが目を覚まし、自分たちのことに気づいた幸希たちは表情をそのままに順に口を開く。
『実は……あの影みたいなやつなんだけど、あれ僕が変装してたんだ』
『わ、わたしたち……カナが楽しめ、たらって。……ごめん』
双方高い身長を精一杯縮こまらせ喋るさまは懺悔そのもの。一方的に告げられたカナは言葉の意味を理解するのに数分かかり、理解した際にはただ呆れた。
「ははは！　ということはあれかな？　カナ君が妖怪だと思った恐ろしいものは、お兄さんお姉さんが用意した親切心によるものだということかな？」
「なんでも職場の知り合いにそういうのが得意な人がいたそうです」
愉快そうに笑う山本をみてカナは話をつけたしつつも再び呆れる。それは幸希たち

二人もそうだが、山本に向けたものでもあった。
そもそもカナが今回久しぶりに病院を訪れたのは、四年前に自身を診てくれた山本がカナを呼んだからだ。幸希が言うには、カナが気絶して倒れる際に頭を打ったらしく、念のためカナが寝ている間に電話を掛けたら明日の放課後に様子を診せに来いとのこと。
カナ自身特に用事もなく、病院自体も中学からそれほど離れていなかったので放課後にそのまま来た。そして着いて早々に検査でもすると思いきや、山本の所有する部屋に連れてこられて世間話。
別に怪我自体はとうに治っているのだし気にしてはいないが、それでも医者かとは思わずにいられない。
「いやあ、この歳になると仕事以外で話すこともなくてね。見たところ怪我の具合も大丈夫そうだ」
カナの表情から察したのかそう言うが、本当に申し訳なく思っているのか怪しいところである。けれど四年という期間を付き合うカナにも山本の考えはよく分からない。恐らくそれすらも考えの内なのだろう、まるで孫の駄々を聞いたような表情をしながら言葉を続ける。
「それにカナ君が聞きたいのは、例の物語の方だろう？」

「ほんと、いい性格してますよね」

何か情報でも掴むことができたのか、意味深に笑う山本に対してカナは思わず手が出そうになる。分かっているのなら聞くな、というもの。カナにとって山本は恩人に違いないが、人柄のみ見るならば何とも言えない。

「何か分かったんでしょうか？」

「それなんだが……どうもさっぱりなんだよねこれが」

ため息を吐きながら両手をやれやれ、とわざとらしく振られる。思わずこぶしに力をこめるカナだが、それもすぐにおさまった。

山本の口調や仕草こそ先ほどまでと同様ふざけたものだ。これまでカナが何度手が出そうになったかなど数え切れない。実際機嫌が悪いときはその腹にボディブローをくらわせたこともあった。

だが今日に限っては違った。その眼鏡のレンズを通して見ることのできる二つの瞳。つい先ほどまでカナをからかうように見ていたその瞳が、いつになく細められカナを見つめている。

そうしてゆっくりと口を開いていく山本を、カナは止めなければいけない。何故かそう思った。ただ漠然と、しなければならないと考えた。けれどカナはその瞳に射抜かれ止めにかかるどころか、自身の体に力を入れることができず、その言葉を待つしかない。

「でも君はもう、分かってるんじゃないかな」
確信染みた声音からはいつもとは違う、誰か別人と話しているようにカナは感じた。
「大丈夫だよ。何か助けが必要ならすぐ私に連絡をするといい」
――物騒なのはお兄さんたちを呼んでくれると嬉しいけど。頼りない笑みを浮かべながら呟く山本には、もう数秒前までの威圧感のようなものはない。レンズの向こう側に見える瞳は、とてもきれいで澄んでいるように見えた。
「……どうして、私にそこまでしてくれるんですか」
それは当然の疑問。当時ただの小学生だった、混乱状態にまであると言われていたカナの頼み、物語についての相談を無条件で引き受けた山本への。
カナ自身に何のデメリットもないため気にしていなかった。そして四年も経ってしまった今頃だが、カナは何故かその言葉を口にせずにはいられなかった。
反応は顕著の二文字に尽きる。目を丸くし、口を少しだけ開いている。いかにも驚いていますよ、といったようなその表情にカナは少しの不快感を覚える。
山本にも伝わったのだろう。カナの表情を見ると気を取り直したように咳ばらいをし、少し考えるように顔をふせた。ただ、そうして返事を返すまで長くはなかった。そもそも考えなければ出てこないような物なのか、と長さに限らずカナは未知の答えに戦々恐々としていたが。

それでも山本は数分とかからず、まるで今思いついたかのように顔を上げる。
「君が、私の孫に似ているからかな」
その声は、とても穏やかだった。

「……今日は、ありがとうございました」
「いやいや、私も好きでやってることだからね」
山本が口にしたあの一言の後、これから物語はどのように進むのかなどを矢継ぎ早にカナが捲し立てて帰ることに。普段はまだもう少し話したり相談したりしているのだが、山本の一言が気恥ずかしく思ったのだろう。
現に山本はとてもにこやかに笑っているが、カナは挨拶をしているにも関わらず直視できていない。自身の反応を見て楽しんでいることが、カナの同年代と比べて回る思考において容易に想像できたからだ。
周りからはすれ違う患者や職員達に微笑ましく見られながら内心で悶絶。カナはそんな現状に耐えられず、挨拶はしたからと医師に背を向けて出口へと向かう。
視線は表情を見られないよう前ではなく下を向き、歩くペースも普段と比べれば明らかに早くフラフラしている。同情の余地は多分にあるため、カナがそんな行動をしてし

まうのは仕方がない。けれど場所が悪かった。
現在カナがいるところは病院。生暖かい目で見ていた患者や職員達があちらそちらへと動き回っている。
「え、わっ!?」
そのため、カナのような動きをしている者が人とぶつかってしまうことぐらい容易に想像できる。
「あいたた……って、すいません！　お怪我はありませんか!?」
もしカナがいるこの場が路上ならば、よっぽどガラの悪い者でない限りぶつかった程度すぐに許すだろう。だがこの場、病院は当たり前ではあるが路上よりも圧倒的に体の弱い者が多い。
仮にぶつかった相手側に何の支障もなく、そして許されたとしても場所が場所だけに気まずいことこの上ない。
「ったく、こんなところでぼさっとしてんじゃねえよ」
「本当にすいません！　次からは気をつけ、ます……？」
間の悪いことに、カナがぶつかったのはそれこそガラの悪いやからのような男だった。
場所を気にしてか怒鳴りこそしないものの、高圧的な口調に鋭い目つきと金に染めら

れた短髪。これに限っては男が悪いわけではないが、同年代と比べ平均的な身長でしかないカナなど比べるべくもない高身長も威圧感が漂う要因といえるだろう。

そんな相手にすごまれたカナの声は、徐々に尻込みしているかのように小さくなっていく。

けれどどうしたことか、確かに声こそ小さくなっているがその瞳に怯えの色は見られない。それどころか話す言葉自体、最後には疑問符をつけてしまっているほどだ。

そして目をぱちくりとさせた後、カナはおもむろに口を開いた。

「……って、なんだびっくりした。誰かと思ったらアカリちゃんじゃん」

それは、あまりに場違いな言葉。

カナがぶつかる以前から行く末を見守っていた周囲の者たちが、その言葉に思わず視線を動かしてアカリちゃんとやらを探す。少女が絡まれていると向かおうとしていた警備員など、一歩踏み込んだところで目を丸くして固まった。

自分よりも年上の、それもみるからにガラの悪い者相手に絡まれている状況で放つ言葉ではまずない。そのため、近くにそのアカリちゃんという少女がいて思わず呼んでしまったのか、と周囲の者たちはとりあえずの納得をつけた。

「お前からぶつかっといてそれはねえだろ。……つうか、いい加減アカリちゃんはやめろっての」

――お前か。

その言葉に恐らくはカナと返事をしたガラの悪い男、それ以外の全ての者がそう思ったことだろう。

「夜野田(よのだ)でも灯(あかり)でもいいから、先生をつけろ」

周囲が何を思っているかなど気にも留めない。やってやったとにこやかに笑うカナへ向けて、男は呆れたように呟いた。

カナにつっかかったかのように見えたこの男の名前は夜野田灯。会話からも察せられるように、関係といえば小学生時代の元担任に生徒と、至って平凡なもの。

仮にも教師としてその身なりはどうなのかという声は多いが、これで中々カナたち生徒には評判がいい。

事実カナがまだ物語について悩み、クラスメイト周囲に溶け込めずにいた際に夢小説を教えたのは何を隠そう夜野田灯その人。その外見で教師というだけでも驚きであったのに、カナが試しにと夢小説を読んだ際に呆けたのはいい思い出だ。偏見よくない。

「全く……確か巻だったか？　こんなあだ名つけやがったのは」

「その名前で肝試しに毎回提灯持ってきた先生も悪いよ？　真っ暗で怖いのは分かるけどさ」

「ばっか、あれは提灯型のランタンだ。雰囲気出てただろ？　あれで結構高かったんだ

ぜ」

「明るすぎてぶち壊しって皆言ってた」

変わらず楽しそうに笑うカナとあんまりな言葉に呆然とする灯。そんな二人が話す肝試しとは、清嗣がリーダーとして昨日も行っていた清十字怪奇探偵団の調査のこと。

カナの知る物語とは違い、小学生の時に作られた清十字怪奇探偵団。夢小説の件と同じく、その切っ掛けとなったのは灯であった。

四年前の退院後、カナは怪我で記憶喪失になったため大人からは以前と違う、おかしいとは、少なくとも面と向かって言われることはなかった。けれど、事件以前まで友人で会った小学生相手に全て理解しろとは酷な話。カナ自身も今以上にこの世界を認めることができず孤立し、周りからは腫れ物扱いされるようになっていた。

そんな時に動いたのが、当時から卒業までカナの担任であり続けた男性教諭である夜野田灯。灯はカナが再びクラスに馴染むよう、妖怪の魅力（？）に目覚めたクラスでもカーストの高い清嗣をだしに、肝試しと称して自由参加で様々な地域を見て回る活動をはじめた。

実際のところ、最後まで残ったのは氷麗と青田坊を抜いた物語のメンバーのみ。他の子と違って参加を強制されていたカナはもし妖怪が出てきたら、と毎回普通に嫌がったが。

だがこれを切っ掛けに、物語では中学生になってからできるはずの清十字怪奇探偵団が小学生時に結成され、その活動の中で一度たりとも妖怪と出会うことのなかったという事実。この物語との乖離は、カナとしては心の奥底で何より待ち望んでいたこと。

金髪で口調も悪く、ぱっと見チンピラのような教師。先ほどは誤魔化していたが、誰がなんと言おうと持参した灯りは決して手放すことがないほど怖いものが苦手と名高い。そしてそうにも関わらず、毎回律儀に場所を調べて現地まで送ってくれる、そんな教師。

これらの事実と、後に知ったその人となり。今でこそ酷い扱いをしている灯という教師は、カナが恩師と呼ぶほどには尊敬している者であった。

「あ、そういえば今日はどうしたの？　風邪でも引いたの？」

「ここの医者とちょっと知り合いでな。……丁度いい、今日お前の兄貴たちに呼ばれてっから帰り送ってやるよ」

言いながら灯が放った何かをカナが落とさぬよう慌てて受け取る。何を投げたのか、とカナが受け取った方の手の中を見れば見覚えのある車の鍵。つまりは灯の用が済むまで車の中で待っていろ、ということだろう。

ただ、送ってくれること自体はありがたいが、いきなりの仕打ちにカナは灯をジト目で見てしまう。それを見た灯は鼻で笑った。よっぽどアカリちゃん呼びが気に障った

のか、大人げないと思いながらもカナは大人しく駐車場へと歩き出す。
「――もういいぜ」
仏頂面のまま病院を出ていったカナを見送った灯が、ようやくと言わんばかりにそう呟く。
けれど灯の視線は見送る際と変わらず出口を向いており、その方向に人は誰一人いない。ならば灯の周囲の者に向けた言葉かと言えばそうでもない。何故なら灯の周囲もまた、いつの間にか誰一人としていなくなっていたのだ。
けれど呟いた後数秒、不意に灯の背後の空間が歪む。
「いやあ、君がアカリちゃんとはね。ふむ、中々珍しい物が見れたよ」
さも愉快と笑いながら現れたその人影は、つい先ほどまでいたカナと話していた山本という老医師。
外見上は先ほど同様白衣を着ており一見なんの変わりようもない。だがその雰囲気はカナと談笑していた時とは違ってどこか重く、それも山本だけでなくその周囲にまで及んでいるように感じられる。
「……頼むからそれは忘れてくれよ」
山本自身、そしてその周囲にはそこらの人間なら思わずたじろぐほどの空気で佇んでいる。にも関わらず、灯はなんら気負った素振りもなく振り返りながらそうごちた。そ

れも山本同様対抗するかのごとく、重く苦しい雰囲気をその身から放ちながら。
　山本はそれに少し眉を動かすも、所詮はその程度。灯と同じく、なんら気負った様子もなく笑いながら返事を返す。
「それはちょっと出来ない相談かなあ……っと、それより今日はどんな用件だい？　いきなり来るって言うもんだからなんの準備も――」
「今日聞いた、これからの物語の詳細を教えろ」
　医師の雰囲気がより重く、冷たい物へと変わる。
「……君は、君たちは彼女をどうするつもりだい？」
「逃げ出したあんたには関係ねえ……と言いたいところなんだが、安心しろよ。俺も自分の生徒を傷つけるつもりはねえよ」
　灯の言葉を聞き、理解した医師は見るからに眉を顰める。それは灯の言う逃げ出したという言葉からくるものなのか、それとも灯の言葉の真偽を思ってか。
　山本、或いは灯にのみ通じるそれは、けれどひとまずは納得がついたのだろう。しばらくして山本が息を吐いたのを皮切りに重苦しい空気は離散し、白衣の懐から取り出したメモを灯へと手渡した。
「……人のこと言えねえけど、爺さんもたいがい面倒な性格してるよな」
　渡されたメモの内容を確認した灯が呟く。それは灯にとってただの独り言でしかな

く、答えなど誰にも求めていない。けれど独り言にしては大きいその声を山本の耳は容易く拾う。そして鼻で笑った後、灯と同じように呟いた。

——彼女は、私の孫のようなものだからね。

その頃灯は既に出口の近くへと歩を進めていたため聞こえることはなかった。ただ、灯の背後に現れた山本のさらに背後。蠢く影に潜む異形の姿をした者たちが、その言葉に同意するかのように騒ぎ立てていた。

「そういえば、何で今日先生が私の家に呼ばれたの？」

「お前よく知らねえけど昨日なんか危なかったんだろ？　この前幸希と飲んだときに俺が病院行くって話してたし、念のため足にって思ったんじゃねえか」

「……ほんと仲いいね」

灯と幸希が出会ったのは小学生時代、カナの三者面談がはじめてだと、少なくともカナはそう認識している。

何故かと言えば、灯がカナの担任として職に就いたのは事件後。けれど三者面談での息の合いようはまるで長年連れ添ったようなもので、主役であるカナを放って遊びの約束を取り付けるほどだ。

チンピラのような灯に、好青年と評判の幸希。相性というのは本当に分からないものだと四年経った今、灯によって送られた自身の家の前でそう思う。

「ただいまー」

「邪魔するぜ」

その後色々と考えたが、どのみち玄関前で話しこんでいても仕方ない。用が分からなければ本人に直接聞けばいい。正論、又はおよそ脳筋よりの答えを出した二人は鍵の開いた家へと入っていく。

扉を開けて見えるのは、左右に扉が取り付けられ、奥には二階へと上がることのできる階段が置かれた一本の廊下。

カナは写真もないため長女の姿を見ておらず、年齢に関しては誕生日を祝いこそすれ兄姉の内誰一人として知らない。けれど兄姉である幸希と菊乃の容姿は四年前と変わらず若々しく、二十代どころか未だ学生かと言われてもおかしくない程。

二階建ての庭付き駐車場付きの一戸建て。見るたびにカナはまだ若い彼らが何の仕事をしているのかと不思議に思う。もっとも聞くたびに年齢同様誤魔化されるが好青年、人見知りの彼らに限って水商売などの危険な仕事に就いてるのでは、といった心配こそなかった。

――そう、心配などしていなかったのだ。

「……なあ、暗くねえか」

現在の時刻は太陽も落ちかけ、徐々に影が伸び始める夕暮れごろ。暗いと感じるのは当たり前であり、本来灯は何を言ってるんだと呆れられてもおかしくはない。

けれどカナはその言葉を否定することなく、ただ無言で灯へと肯定の意を示す。先ほどまで、それこそ家の中に入るまでは用件のことばかりで気にしてはいなかった。だが、この時刻ならば点いていて当然の家の中の明かりが点いていなかったのだ。

故に、なぜ暗いのか。それも家の中という閉鎖空間でもあるため、その暗さは外の比ではない。まるで家の中と外とで世界が違うかのような、とてつもない違和感、そして見覚えのある寒気をカナは感じる。

「ちょっ、待て家長！」

はやる心をそのままに、カナは灯の言葉を無視して一歩踏み出す。

服装は学校帰りそのままであるため未だに指定の制服。けれど履いたままのスニーカーはそもそも指定されていないお気に入りの物。過去に姉である菊乃に買ってもらったものであり、だからと言ってそのまま家に上がっていいはずがない。

普段は大人しい姉とはいえ、静かにでも怒る様が想像できた。それに口元から自然と笑みが浮かぶが、どこか力ない。

夢を見ているかのような、ふわふわとした心地のまま二歩目を踏み出す。

床には乾いた砂が落ちている。それはカナのスニーカーの裏に付いていたものであり、振り返れば点々と足跡のように形作っていることだろう。

菊乃に怒られてしまった後、苦笑いながら箒と塵取りをもって来る幸希がカナの脳裏に浮かんだ。乾いた笑いが漏れ出たのは、誰の口からだったか。

三歩目を踏み出したところで、リビングへと繋がるガラス戸になんらかの影が見えた。

そして同時に、赤い池に倒れ伏す兄姉をカナは幻視した。激しい運動をしたわけでもないのに息が荒くなり、背筋になにか冷たいものが走る。それは家に入りその暗さを実感した時と同じく、カナにとって酷く身に覚えがあるものだ。

記憶にも新しいそれはつい昨日、幸希が扮したという恐ろしい何かを見たとき。感じたこともないような恐怖によって体が動かず、ただ意識をなくすことしかできなかったそれ。

何もそれは恥じることではない。未知というのは期待と好奇心を煽り立てるものだが、同じように一握りの恐怖をその心へと植え付けるのだから。

だから、逃げればいいのだ。旧校舎の時と同じ、カナにできることなど何一つないのだ。そもたった一人の少女に何ができると、何をさせるというのだ。

幸い、あの時とは違って後ろには灯という頼れる大人がいる。後ろで震えているだろ

う彼は、カナが望むなら震える足を叱咤しながらも助けてくれるだろう。
だからカナは――ガラス戸へ向け四歩目を踏み出した。
足は情けなく震えている。頭の中は恐怖一色で、両の瞳には溢れんばかりの滴。それでもカナは震えながらガラス戸の取っ手へと手をかけた。
食堂の時と違うそれは、カナの中でリクオ達と幸希達との比重が違うからというわけでも、灯が頼りないからというわけでもない。
確かに事件後最も世話になったのは幸希達、そしてカナの記憶上、実際灯は見た目だけで少しばかり頼りない。なら昨日と今日という短い期間の中で何がカナに影響を及ぼしたかと言えば、それは主に二つある。
一つは、自身の認識の甘さを嫌というほど思い知った昨晩。
所詮は物語に過ぎず、自身とその家族が危機に瀕することなどあるわけがない――そんな、現実逃避に過ぎなかった思いを粉微塵に打ち砕かれた。それは信頼する兄が扮したものだと言われたとしても、その程度で納得できるわけがない。
それでもカナは最後の一言を口にすることができなかった。それは、きっと言ってしまえば壊れてしまうから。今までの価値観とこれから生きる道、なにより家族やリクオ達を人としてみれなくなる。
けれど二つ目、自身に向けられたある一言。

『君はもう、分かっているよね』

それは突き放すように冷たく、それでいて何より優しさをもった一言だった。

涙を拭った手で、かけた取っ手に力を入れる。それに合わせ、ガラス戸が徐々に開かれていった。至極当然ながら、戸の向こう側にいた影も徐々に露わとなってカナの前にその全容を見せる。

怯えながらも、カナがその背中を向けることはない。今のカナには、覚悟があった。これまでの常識を捨てるための、彼らを人と見れないなど烏滸がましいと自信を叱咤するための覚悟が芽生えていた。

不幸中の幸い、カナは文字通り一歩を踏み出すだけでよかった。何故ならカナは、ずっと前から分かっていた。分かっていて、気づかないふりをしていた。後はもう、気づいていることを認めるだけでよかったのだ。

それが偶然にも、物語が始まって直ぐに身に着いた。以前までのカナならば、それは恐らく忌避してしかるべきもの。ただ覚悟の芽吹いたカナにとっては、もはや歓迎以外の何ものでもない。そのためありのままの、目の前の光景を受け入れようと目を見開いた。

「あれ、え……っと二人とも早かったね」

――エプロン姿で、料理を運ぶ幸希の姿を。

「……へ？」

カナは目を丸くし口を開け、ぽかんとした顔で何故か気まずげな幸希を見る。頭の先からつま先まで、傷一つなく具合が悪そうにも見えないその姿はまさしく健康体そのものだ。

「幸希、料理できた。こっちも運ん、で……！」

声のする方へと視線を向ければ驚いた表情でカナを見つめる菊乃。リビングの奥にあるキッチンでいつものマスクに幸希と同じくエプロン姿。その手には湯気立ち、食欲そそる香りを放つ料理が盛られた皿がある。

姿から彼女がつい先ほどまで料理をしていたことなど容易に想像でき、まず間違いなく無事だ。

「お前ら……電気つけずになにやってんだよ」

その硬直は、恐る恐るといった風に現れた灯が呆れたように話すまで続いた。

結果として幸希と菊乃、彼らは幸運にもカナが想像していたようなことは一切その身に起きていなかった。彼らはただ、カナに対してサプライズ行おうとしただけだったのだ。

旧校舎の件を懲りていないわけではない。むしろ反省していたからこそ、カナに喜んでもらおうと普段より豪勢な料理を作り、パーティのようなものを画策していた。

もっとも、帰りの時間が想定より早かったため飾り付けも出来ず、料理も中途半端。さらには旧校舎よろしく、カナをとことん怖がらせる結果に。

「いや、本当にごめん……」

「もう……しな、い」

そしていきさつを白状した元凶二人は正座の状態でへこんでいた。なんせ現在呆れた表情をしている灯に対しては初犯だが、カナは今回ので二回目。それも一度目は気絶し、二度目の今回は目が赤く腫れており泣いていたのがよくわかる。

全てカナのためにと思ってやってきたことだけに、その心情は推してはかれるというもの。実際、二人ともいきさつを話し始めてから何も言わず俯いたままのカナをちらちらと様子を窺っていた。

そしてその状態から数分が経った頃。

「……二人とも」

俯いたまま発したカナの言葉を、二人はどのような心持ちで聞いただろうか。少なくとも良いものではないだろう。血色のいい健康的な肌色だった二人。けれど今では、特に顔に至っては見るからに青白く、目は伏せて静かに続きを待っていた。

カナは、二人にゆっくりと近づいてく。一歩進むたびに二人の肩は揺れ、目を強くつむる。そしてカナが二人の目の前まで来たとき――。

「……？」

二人は一瞬、自分たちが何をされているのか分からなかった。けれど何かに包まれたかのような安心感、そして人肌ほどのぬくもり。徐々につむっていた目を開けていくと、そこには相変わらず呆れた表情の灯、そしてすぐ近くにあるカナの頭。

そこまで来て、二人はようやっと抱きしめられていることに気づく。まさか憎まれ口を叩くことこそあれ、自身の妹が抱きしめてくるとは思いもしなかった。二人はいきなりのことに慌て思わず離れそうになるが、続くカナの言葉によって妨げられる。

「二人とも、ただいま」

それはどこか吹っ切れたような、清々しい笑顔だった。

三話

時刻は中学があるにしても幾分か早い、未だ日が昇り始めたといった頃。

「……眠い」

パジャマ姿のカナは、言葉や目をこするといった仕草から未だ夢見心地。けれど一歩、また一歩。覚束ない足取りではあるものの、確かに二階にある自身の部屋からリビングへと歩を進めていた。

時折何ということもなく立ち止まり、伸びをしながらもたどり着いたのはリビングの扉。玄関から歩いて数歩程と近く、向こう側の景色が薄っすらと見える曇りが入ったガラス戸。

徐々に目が覚めてきたカナは目的地でもあるそれを見て思わず顔をしかめる。それはつい昨日の晩、愛すべき天然の入ったカナの兄姉である幸希と菊乃が行おうとしたサプライズを思い出したから。

正確に言えば、もはや二人が行ったことに関してはもう気にしてはいない。どうでもいいというわけではないが、そういうものだとでも思わなければ疲れてどうしようもない。尊敬こそしているものの、それが四年という時間を共に過ごした末に感じた二人に

対するカナの正直な思いであった。
ならば何故そのような表情をするのか、それはひとえに昨日のカナ自身における行動に起因する。この世界で生きることを心に決めた際、カナは感情の高ぶりや安心感もあって思わず二人に抱き着いた。
なんてことはない。一日たって冷静になり、昨日のことが途端に恥ずかしく思えてきたのだ。
まだ抱き着いただけならここまでは思わなかっただろう。恥ずかしくはあるがお互いに勢いあってのことなので誤魔化せはする。ただその後、勢いそのままにカナは二人に甘え、二人はそれを快く受け入れた。
精神が同年代の子どもと比べ成熟していたカナは、今まで多少のデレこそあれ甘えるといったことはなかった。そのためだろうか、その場の雰囲気もあり内容こそ明記しないが、埋め合わせるかの如くお互いに自重はしなかったのである。灯が呆れた顔で早々に帰ったのは言うまでもないが。
とはいっても、この先の一生を二人と会わずに過ごすなんてことは不可能。仮にカナがそれを実行したとしても、妹愛溢れる二人にかかれば一日とかからず失敗することだろう。
そのためカナはこの世の終わりを認めたかのような顔で取っ手へと手をかける。昨

日のような恐ろしい光景ではなく、少しはにかみながらも朝ごはんをもって自身を迎える二人を想像しながら。

「あれ、おはようカナ。今日はいつもより早いんだね？」

扉を開けて見えたリビングの光景は殆どカナの想像通り。朝食が乗っているのだろう、湯気立つ皿のある盆を片手に幸希がにこやかにカナへ挨拶をする。

そこにあえて違う所を挙げるとするならば、それは皿をテーブルに並べていく幸希とは違って菊乃の姿が見当たらないこと。そのことにカナは多少の疑問を覚えながら、未だ少し眠たげな頭でもって幸希にそのまま投げかける。

「キク姉は？」

「菊乃は仕事だよ。今日は早番らしいね、カナと朝ご飯食べられないのが残念だってさ」

内気で口数少ないながらも家族愛に溢れる菊乃。カナはそんな菊乃がトボトボと玄関に向かって歩く姿が容易に想像でき、思わずといった風に乾いた笑いを漏らす。

「はは、なんか想像できちゃうね」

「まあ菊乃はカナのこと大好きだし、昨日もあんなことがあれば……ね？」

カナは言われた直後、幸希が何を指して言っているのか分からなかった。けれど数秒もしないうちに何が言いたいのか気づき、その顔を耳に至るまで真っ赤に染め上げる。恐らくそれは紛れもない、リビングに入る以前にカナが想像したことだろう。

普段は年齢も性別も分け隔てなく親身に接する幸希の、今回に限っていたずらっぽくもカナの様子を試すような口調だ。

手に持つ盆に乗っていた皿をテーブルに並べていく幸希、背を向けているためカナからはその表情こそ見えない。それでも時折震える肩から、口調相応の表情をしていることなどカナには容易く理解できた。

「……いただきます」

自分もそうだっただろ――と言いたいところだが、生憎とカナには幸希を口で負かすなんて経験は記憶にある限り皆無。

未だ赤面のまま、渋々といった動きで椅子に座り朝食を食べ始める。その様子すら幸希に微笑ましいと思われているとは考えもついていないのだろう。

『皆さんおはようございます！　毎週末企画の「朝一番観光所巡り」。今日はここ京都の二条城より、ゲストの方を交えてお送りしたいと思います！』

カナが食べ始めてしばらくもしないうち、不意に聞き慣れぬ声に気づいて皿に向けていた視線を上げた。

視線の先はテーブルのどの席からも見られるよう、高めに置かれた台に乗っている一つのテレビ。映像は風情ある日本式の建物を背景に、女性が画面に映るもう一人を紹介しようとしているところだ。

女性の方はカナも知っている。美人のアナウンサーで番組問わずよくテレビにも映っていたし、クラスの男子が休み時間中に話していたのも聞いたことがある。

一方、もう一人は顔に深いしわが彫られており、ぱっと見厳つい老人と言えるような風貌の男性。たくましくも長い髭を蓄え、見た目に反して衰えを感じさせないその堂々とした身を法衣のような着物で包んでいる。

カナは、そんな老人の方も知っていた。むしろ女性よりもよっぽど。ただそれは、女性を知っていた事と同じような経緯ではない。

『なんとこの方は、あの京都一の名家と名高い花開院（けいかいん）家のご当主、花開院秀元（ひでもと）さんです！』

『皆様、お手柔らかにお頼みます』

カナは思わず自身の向かい、テーブルの向こう側へとテレビから視線を少しずらす。そこにはカナと同じように、自身で作った朝食を食べるため席についている幸希。けれど手元付近にはテレビのリモコン、体の向きこそカナ同様テーブルへと向かっているがその楽し気な視線はテレビへと。

それらから突如点いたテレビは幸希によってということが分かる。ただ気にはしたものの、その何の気ない様子からカナはまたテレビへと視線を戻す。

――花開院

カナの知る物語において、花開院とは妖怪退治を生業とする陰陽師（おんみょうじ）の一族。
彼らは初めこそ四分の一とはいえ妖怪である主人公のリクオと敵対するも、最終的に共通の敵を倒すために良き好敵手として共に戦うことになる。個々人によって程度は異なるが、その際の活躍から物語における花開院という名の重要度は計り知れない。
そしてテレビに映るアナウンサーが紹介したように、花開院秀元とは27代目に当たる現頭首。存在こそ序盤から言われていたが、実際にはいわゆる京都編にて初登場。そして同編、人々を守りぬくという志半ばにも敵妖怪の幹部に殺されてしまった人物。
カナが今生を、この世界で生きていくことを決めたのはつい昨日。そこに確固とした覚悟がなかった訳ではない。だがテレビ越しとはいえ、こうしてまた新たに物語に出ていた人物。それも初めての物語内で死ぬ人物を見て、知らず心が僅かに震えた。
「カナ知ってるの？　陰陽師とか結構マイナーだと思うんだけど」
「……へ？　あ、うん!?」
カナは自分自身何を考えていたのか、声が自身へ向けられたということに一拍遅れて理解する。そしてそれに驚き慌てて答えるも既に遅い。気づけばテレビを眺めていた幸希が不思議そうにカナを見つめていた。
「友達が、そういうのにちょっと詳しくってさ」
「この前会った清嗣くんのことかな？　確かにあの子そういうの好きそうだね」

「そうそ……って、もうこんな時間!?　ごめんコウ兄、残りは帰ってから食べるね！」
「りょうかい、気を付けて行ってくるんだよ」
　白々しいにもほどがある様子だが、事実カナ本人が予定していた時間を経過している。気まずげに壁に掛けられた時計へと視線を移したカナ。現在の時刻に気づくと食べかけの朝食をラップがけし、慌てた様子でリビングを飛び出した。
『では花開院さん、番組の最後に一言よろしいでしょうか?』
『暇さえあれば遠慮せずにいらっしゃい。ワシらは、ここ京都は誰であろうと拒むことなどせ――』
　幸希の指がリモコンに触れると、瞬きする間もなくテレビから色が消える。音すらもカナが出ていったことで、独り言をすることもない幸希の周りからは消えていった。
　けれど音のない空間の中、色の消えたテレビへと向けて目を細めた幸希。その眼差しには尊敬、哀愁、郷愁、様々な葛藤。未だ湯気の立つ目の前の料理に揺れ動くその瞳。ただそれらだけが、唯一時間の進みを感じさせた。

　普段こそ登校してきた生徒たち等により、やかましくも楽し気な会話が溢れる昇降口。けれど門自体は開いてはいるが、やはりこの時間はまだ早いため通る生徒もまば

ら。下駄箱に入っている靴の数も心なしか少ない。

「……ん、どこだっけ」

そんないつもとは違う雰囲気といえども、実際それだけで何が変わることはない。むしろカナからすれば気にしろという方がおかしな話なのだろう。

何を感じ入ることもなく、欠伸交じりに自身の下駄箱へと向かう。

「カナちゃん！」

突然背後から聞こえてきた声。朝一にしてはあまりに大きなその声に、驚き周りを少し気にしながらも振り向く。

「おはよう！」

「おはようリクオくん、お互い今日は早いね」

傍目にも明らかに眠たそうに、見つけた場所へと脱いだ靴を入れようとしたところに話しかけてきたのはリクオ。

朝早く眠いだろうこの時間でも朗らかに、一欠けらほどの負の感情すらも見当たらないその笑顔。カナは一瞬といえど出ていた、こんな朝早くに大声で誰だという思いに、少しの申し訳なさを感じながらも返事を返した。

そのまま別れる理由もなく、むしろ初めはお互いに機嫌よく目的地であるクラスへと。途中に心霊や恋愛など普通の学生らしく、他愛もない話を続けながら二人は歩き始

める。
　ただその間に、カナは徐々に機嫌を悪くしていた。そのことに気づかないほど鈍感ではないリクオだが、生憎気に障るようなことをした覚えもなくただ狼狽える。
　カナもそんなリクオの狼狽えも、その理由が自身の機嫌によるものだと理解していた。そのことにカナはリクオに対して再び申し訳なさを感じている。だが、後ろから迫る気配を思うとどうにも気が滅入って仕方がなかったのだ。
「やあ、君たちごぶさたぁ。あのとき以来だねぇ……」
「き、清嗣くん……？」
　溢れるような影と重圧をその身に纏い、背後からカナとリクオの方に両腕を預けた清嗣。狙っているかのようなその雰囲気もさることながら、語尾を伸ばす口調すらも酷く重々しい。その様子は理由を知っているであろう、リクオすらも若干引いてしまっているほど。
「清嗣くん重いー」
「あっ、すまない家長くん……って違う!!」
「いいじゃん、すごい反省してたよ」
「そうだけど！　そうなんだけど!!」
　廊下の真ん中で女子生徒の両肩を掴み、前後に揺さぶりながら叫ぶ男子生徒。その声

につられてか、近くの教室から生徒や教室が何の騒ぎだと覗きに来るがそれも直ぐに散っていった。

イジメに見えなかったとしても止めるべき案件だが、そんなことをするのは周りでオロオロと様子を窺うリクオぐらい。他の殆どはまたあいつらか――と、呆れて元居た場所に帰っていく。

カナはその事実に死にかけの目で助けを――と、近くにいるだろうリクオの他に頼れる島を探してみる。清嗣いるところに島あり。そばにこそいないが、少なくとも清嗣がいるにも関わらずいない筈がない。

そうして見えたのは、まだこのやり取りを見慣れていない野次馬の中に一つ紛れている金の色。身長が低いため顔や体こそ見えはしないが、思わず校則を確認したくなるあの髪色で隠れきれるはずがない。

カナはこれが終われば必ず、かの邪知暴虐、出来もしない他人のふりする島を除かなければならぬ――と、清嗣によって揺れる頭の中で決意した。

もし、だ。仮にカナの側に非があるならば、大人しくこの状況も受け入れたことだろう。けれど清嗣が荒ぶるのも、今回に限ってカナは何故私がとしか思えない。

何故なら清嗣が荒ぶる様子にカナが察したのは、例の旧校舎で行われた肝試しについて。大方、やっと妖怪と出会えたというのにその正体はただの人。それも一緒に来てい

た友人の兄という事実。事情も説明され誠心誠意謝られはしたが、溢れる思いが止まらなかったといったところ。

実際何の過不足なく当たっている。そしてそれを理解出来ていると取るか、それとも清嗣が分かりやすいと取るかはまた別の話。

どちらにせよ、カナは大した抵抗もせずにされるがまま。ほぼ孤立無援といった状態も一役かっているが、このちょっとした公開処刑ももうじき終わるため。それは物語由来の予想。元より大きく異なっては入るが、それも今更というものだろう。

カナの視界には、リクオが自身を心配して残っているのを揺れて捉えられた。そしてさらに、その奥の野次馬から進み出てくる人影。カナはその人影に、自身の自由を確信した。

そして人影は近くまで寄り二人へと声をかける。そう、それは物語通り幼くも凛とした少女、雪女の妖怪であ――。

「おい、その辺にしとけ」

「へ……？」

かけられた声はカナの予想に反し、小さくとも野太く力強い声。驚きに声を揃えたカナと清嗣が見れば、そこにいるのは声音通りの体格をした大男。物語で知っているカナはもちろんだが、清嗣も身に覚えのある彼は倉田――もとい青田坊だった。

「俺はやめろっったんだが」
「え……あ、申し訳ない家長くん。つい熱くなってしまったよ」
「いや、全然大丈夫だよ。その……倉田くんもありがとうね」
突然の乱入者に驚くも、続く二言目に冷静になった清嗣が家長を離して謝罪。そしてそれを見た倉田がカナの言葉を背に受けつつ、いつの間にかいた氷麗とリクオの方へと歩いていく。
そうして多少気まずい空気を残しながらも解散となったのだが、カナは一人その場に残って考えを巡らせていた。
物語ではリクオが荒ぶる清嗣につかまったところを、氷麗(つらら)が清嗣をわざと挑発することで場を鎮める。カナはそれを知っていた。そのため捕まったのは自身なれど、リクオがこの場を離れることが出来るよう氷麗が止めに入ると考えていたのだ。
なのに結果はどうあれ、止めたのは氷麗ではなく青田坊。別に止めてくれるのならばどちらでも良い。それに青田坊の生い立ち故、未だ子どもの域を出ない自身に対して悪感情を抱くことはないだろうともカナは考えていた。
ただ旧校舎で唯一、奴良組の若頭であるリクオから離れてまで自身のそばに青田坊が残った事。その際にも何故、と考えていたこともあって尚更考えてしまっていた。
ただ分からない、理解できない、自身の手に負えないことはどうしようもない。卑屈

で後回し、他力本願ともみられる考えではあるが、自身の現在持っている能力を正確に把握しているカナだからこその考え。

実際程度は違えど、この程度の差異は今までも多くある。そのため気にしすぎ、物語の主要人物ということに捉われ過ぎたのだろうとカナは結論付けた。それになにより、今の流れから今朝があの日だと確信できたのも大きかった。

「あの、ごめんなさい」

リクオ、氷麗、青田坊は何処かへ。清嗣、島は既に教室へ。巻、鳥居は今のような時間にはまだ学校に来ない。知られてはいるものの、清十字怪奇探偵団以外との交友関係がほぼ皆無なカナが彼ら以外に話しかけられるのは珍しい。

そして珍しくも今日に限り、何度目かの背後からかけられたその声。若干のなまりが入っている、申し訳なくも可愛らしい少女の声だ。

「どうしたの？」

「職員室はどこですか？　勝手がわからなくって」

カナは考え中だったこともあり、内心驚きつつも返す言葉はきつくないよう。むしろ明るく、初対面だからこそ特に気安いイメージを持ってもらえるように意識する。

そしてさらに返すのは、初対面にも関わらずカナからしては見覚えのある。近く学校中で噂されるであろう、カナよりも少し背が低い黒髪ショートの少女だ。

「ああ、先生が言ってた転校生かな。なら私も早く来過ぎて暇だったし、折角だから一緒に行かない？」

少女はカナの言葉に少しばかり悩む表情を見せた。それでもカナの接し方が効いたのか、あまり長引くこともなくおおきに――と、一言お礼を言い賛同する旨を示す。それにカナはまた満面の笑顔で返し、次いで今思い出したと言わんばかりの口調、仕草を作って言葉を続けた。

「そういえば自己紹介まだだったね。私は家長カナ、あなたは？」

流石に勢いが強すぎただろうかと、目をぱちくりさせる目の前の少女に不安を感じるカナ。けれどそれも直ぐに笑顔で返事を返されたことで安堵する。

転校してきたことによって、学校だけでなく住む周辺にも知り合いがいなければ未開の地。そんな折に優しい人と会えてよかった――そんな思いが言葉や表情の端々から見て取れる。

カナはもちろんそれに気づいて、内心で気にしなくてもいいのにと苦笑い。

「花開院ゆらです。どうぞよしなに」

何故なら数日前からずっと、名乗った少女に会うためだけに朝早くから学校に通っていたのだから。

「花開院さん人気者だったね」

「はあ、別にゆらでええよ。それに京都のことなんて聞いてもおもろないやろうに。他と違うとこなんて寺や神社が多いぐらいやよ?」

職員室までカナが連れて行った後、教室に戻り朝に行われるホームルームの時間。物語と同じように、ゆらはカナ達と同じクラスの転校生として先生に紹介された。

そして可愛い女の子ということもあって転校生お馴染み、休み時間にクラスの殆どから質問攻め。不快とまではいかないが疲れが出たのだろう。朝知り合いとなった顔を見つけるや否や、カナの所まで逃げて来て今に至る。

陰陽師なのにな――等と心の中で思うところはあれ、表情には一切出すことのないよう笑いながら話を続けるカナ。そんな清十字怪奇探偵団以外の人と話すのがそこまで珍しいのか、周りが驚きながら遠巻きに見るさまは朝と変わらない見世物のよう。

ゆらがそのことに気づいているかはカナにも分からない。けれどそうして目立つことになろうと、カナにとってゆらとの会話はメリット以外の何ものでもない。

――花開院ゆら

物語において、花開院の陰陽師の中でもごく限られた者にしか扱うことが出来ないと言われる『破軍(はぐん)』を扱うことのできる天才陰陽師。

実際に扱えるようになるのは京都編になってからだが、今の時点でも狼や鹿に鎧武者等の式神を複数同時に戦わせることができる。それがどれだけ凄いのかは本職でもな

く、あくまで物語でしか知らないカナにはよく分からない。だが対峙していた敵の驚きからも、その才能による片鱗が垣間見えた。

そんなゆらと現在、カナは物語よりも積極的に関わろうとしていた。振り返るこの四年間、カナからこうして物語の乖離を図ったことはない。この世界が物語の世界だと気づきながらも否定し続けていたカナは、だからこそ幸希や菊乃に灯の存在という乖離を物語の否定だと歓喜していたのにだ。

そしてそれは、もしこの世界が物語とは少しずれただけの世界だったら。乖離をし過ぎたためにハッピーエンドを迎えることが出来なかったら。その思いが何時だったか頭によぎった瞬間、カナは清十字怪奇探偵団に入ることを、リクオ達と同じ学校に通うということを決めた。

乖離を何よりも望んでいたカナは、逆にその乖離が何よりも恐ろしかった。

けれど今は違う。妖怪とは未だ直接会ったことは、少なくともそんな覚えなどカナにはない。けれどそれ以前にも感じながら無視していた確かな予感を受け止め、この世界で生きることを決めた。

物語と差異はあるものの、妖怪も陰陽師もいるだろう一種のパラレルワールドのような世界。そんな世界で家族や友人共々生き残る。目指すにあたって物語に対し忠実に、けれど出来る努力は惜しまない。ゆらとの関係性の構築もそういった思いから。

――もう少し砕けて言ってしまえば、物語の鳥居や巻のように陰陽師についての教えを受けれたらなという下心。加えて物語のいちファン、同じヒロインとしての立ち位置ということで仲良くなってみたいといったもの。もちろんそれだけという訳ではないのだが、俗な理由もあるには違いなかった。

「町内の怪奇蒐集マニアの友人から買い付けた『呪いの人形と日記』がある！　あれを使って必ずや持論を証明して見せる！」

突然の大声と物音に、カナとゆらの会話が止まる。周りの生徒もそれに驚いたようで聞こえた先、教室内の一点を見つめていた。それになんだとカナも視線を向けたそこにはやはりというべきか、今朝も昇降口近くで会った清嗣の姿。その近くに巻と鳥居がいるところを見るにまた煽られでもしたのだろう。

カナは改めて確認したところで一つため息をつき、まだ耐性がついてないため驚き固まっているゆらに友達だと告げる。するとそのことで清嗣の目に入ったのか、それはいい笑顔で二人のいる机へと近づいてきた。

「やあ家長君、さっきは本当にすまなかったね。話は聞いていただろうし、よければうちにこないかい？」

「あー、確か今日は何もなかったかな。いいよ、お邪魔させてもらうね」

快く、とは流石に言い難いが参加することを清嗣に伝えたカナ。それでも参加人数が

一人でも増えたことが喜ばしいのだろう、嬉しそうに笑顔を見せる清嗣。

それを見てカナも思わず笑みを浮かべるが、何も清嗣につられたからというわけではない。それは普段のメンバーである自身の参加だけでこの反応、ならば物語通りだと乗ってくるゆらが行きたいと言えばどんな反応をするのだろうといったもの。

「その話本当？　それ、私も見たいんやけど」

何故か目をキラキラと輝かせ、清嗣に自身も行きたいと申し出るゆら。その反応に清嗣は一瞬呆然とするも、みるみるうちに破顔していく。以前からのメンバー以外にも、人が増えたことがよほど嬉しかったのだろう、比べるものではないだろうが、カナの時以上に大喜び。乗りに乗って偶々教室を通りかかったリクオと氷麗をすら強制参加させていた。

ただ来るかと思われた、元々のメンバーの巻と鳥居は今回も用事があるからと不参加に。それもなにを思ったか下校するまでの間、変わらずテンションの高い清嗣に隠れながらカナに対して度々の合掌。

カナは物語のこともあり来ないだろうとは理解していたが、来れただろうにとは思わずにいられなかった。

島はもちろん強制参加につき、カナ直々にゆらとカナ二人分の荷物運びが命じられ

た。

四話

学校からの距離も然程ないからと、下校後制服もそのままに。目的地である清嗣の家、その中にある目当ての物が置かれている部屋へと着いたカナ達。

元々そこは大学教授を職としている清嗣の祖父が使っていた部屋。現在では丸ごと借り受け清嗣のプライベート資料室としてつかわれている。

清十字怪奇探偵団の立ち上げ以来、時には灯も交えてメンバーも何度か来たことのあるその資料室。

不気味な鉄甲冑の鎧に怪しげな装飾の壷、部屋の中央には清嗣が集めた資料を保管するための大きなガラスケースまで置かれている。祖父は忙しく未だにこの部屋の状況をよく知らないらしいが、見ればあまりの光景に咽び泣くこと請け合いだ。もちろん悲しみで。

「この部屋とか何回来ても慣れないよね」

「ぶっちゃけ超成金っすよね」

「君たち口をつつしみたまえ！　大体それ前に来た時も言ったはずだよね!?」

毎回言う必要があるのかい――などと言う清嗣の悲痛な叫びもなんのその、隙だらけ

だと言わんばかりにカナと島が清嗣の脇を抜けて部屋の中へと入っていく。
リクオやつららはともかくとしても少し緊張していた様子のゆら。けれど今ではカナたちを見て苦笑いを浮かべる程度には慣れてきている。
そしてそんなゆらの様子を見た清嗣を除くカナ達は、少しだが安心したような表情を見せる。なんせここにいる面々は今日初めて会った者ばかり。まだ転校したばかりのゆらが、カナ達とどう距離を掴めばいいのか緊張している様子には誰もが気づいていた。
幸いカナとは転校して初めての友達ということもあり、多少なりとも打ち解けている。そのためカナから積極的に、時には先ほどのように島を巻き込んではここに来るまでの間に何かしら行動していた。
その結果よく標的とされた清嗣の表情が徐々にやつれようと、ゆらという少女の笑顔のためなら躊躇う余地なし。清嗣は犠牲となったのだ。
「全く……さあ、こっちだよ」
もはや学校でのテンションは見る影もない清嗣が部屋の奥、今回集まる切っ掛けとなった物の場所へと全員を案内する。
元々家の中でも奥まった場所にある部屋だが、その中でもさらに奥。他の不気味な品が並ぶ中に、仰々しくも台に置かれてそれはあった。

物の名前をただ読むならば、日本人形と日記。ただそのどちらもが年季が入っているせいもあってか傷んでおり、特に人形についてはそれが顕著であった。以前は艶めいていただろう黒い髪は所々が傷み、抜け落ちた跡もそこそこ。着物についても色が剥げ、花柄の刺繍がほどけかかっている。

初めて来たゆらだけでなく、カナ達も以前来た時は置かれていなかったそれらを前に好奇心にものぞき込んだ。

「これが言ってた人形と本？」

「ほ、本当に呪いの人形なん……？」

「信憑性は高いと思う。持ち主の日記も残ってるから読んでみよう」

そう言った清嗣が年季によって傷んだ冊子を取り、人形について書かれた部分を読み進めていく。

『２月２２日……引っ越しまであと７日。昨日、これを機に祖母からもらった人形をすてることにした。といっても――』

内容は怪談としては定番といってもいい、古い人形を捨てるといったもの。

その口調は場を意識してかゆったりと低く、真面目な顔でなければ態とかと思うほどそれらしい。けれどその口調、もしくは場の空気にあてられてか、殆どの者が硬くなった表情と視線を清嗣へと集める。

「『すると今日、何故か捨てたはずの人形がげんかんにおいてあり、目から血のような黒っぽい……ってどぉした奴良君ー!?」

突然どうしたことか。清嗣が話す日記の内容に皆が固唾を呑んで聞き入っていた時、人形をリクオが勢いよく押し倒す。

「貴重な資料にタックルかますなー!!」

「はは……ごめん、聞いてたらかわいそうでさ」

「んなあほな……」

リクオによる突然の奇行に周囲が驚く中、元あった場所へと自身で置き直す。一応念の為にと清嗣が人形を確認するも、倒されたことによる髪の乱れこそあれ、他にこれといった異常は見当たらない。

「……なんとも、なってないか。まあいい、次だ。貴重な資料だからもうするんじゃないよ」

確認後に何もないと分かれば、不謹慎にも少し残念そうに言葉を漏らした清嗣。当たり前だがこれ以上おかしなことをしないよう、リクオへ釘を刺したところで再び日記の朗読が始まる。　ただ、再開した清嗣へ視線を集めない者が数人。それは言わずもがな、物語の主人公であるリクオを一人目に、その側近として描かれているつららで二人目。

事実清嗣が確認した時は何の異常もなかった人形だがその少し前、リクオが人形を押し倒す直前は違った。リクオが自身で倒した人形を元に戻す際、確かに人形の顔を拭くような素振りを見せていた。そして話が再開したにも関わらず、つららと二人身を寄せ合って何事かを相談するかのような素振り。

それはまさしく、物語のワンシーンのようだと――三人目、カナが一人諦観した瞳で見ていた。

物語で判断するのなら今日この日この場所が、『家長カナ』が初めて妖怪というものを本当の意味で認識する日。旧校舎もカナからすればそうに違いなかったのだが、それは幸希達の善意によって半ば流れたような形になっている。

そして繰り返すもこの世界で生きることを決めたカナは、つい先ほど改めてこの世界の常識（非常識）を認識した。清嗣や島たちとは違い、カナは確かにその両目で見ていた。清嗣の話を聞く傍ら、血涙を流す人形へと視線を移したリクオのように。今尚周りに気づかれることのないよう配慮をしながらも、清嗣の話に合わせて不気味にも髪が伸びていく人形を――確かに見つめていた。

『おかしい……、しまっておいた箱が開いている』

横目で見るカナの視線の先にいる二人は、けれども現状を穏便に打開するための答えを出すことはできなかった。

清嗣が日記を読み進めるにつれて人形に再び変化が訪れる。来た当初のような人形特有の固まった無機質なものではなく、般若のように歪み何処からか刀まで取り出す始末。

「日記を読むのをやめて!!」

流石にこれ以上は危険だと判断したのか、清嗣が日記を読むのをやめるようリクオが声を荒げる。

背後で人形が背中へと刀を突き刺さんとする状況の中、それでも周りを助けようとするその姿。周りが驚いている中、カナはその姿にただ尊敬を覚える。ただ、尊敬の思いが浮かぶのみ。

人形がどれほど強いのかは分からないが、それでもこうして清嗣が知る程度には曰く付きと呼ばれる代物。しょせん一般人でしかないカナが動いたところで、よくてリクオの身代わりとなるぐらいだろう。だから、動かない。けれど、それはカナが自分欲しさにリクオを見捨てたという訳ではない。

視線の殆どが人形に集まる中、カナが一人視線をずらす。そこには動き出した人形によって注目が集まらないものの、身にまとう雰囲気が冷たく研ぎ澄まされたかのようなつららの姿。

このままカナの期待通り――物語通りに進めば誰一人、何一つ怪我を負うことなく今

日を終えられる。仮にそうならなかったとしても、既に臨戦態勢に入っているつららが標的とされているリクオに傷を負わせるはずがない。

カナが動かなくともリクオの命は保証されている。むしろ動いたことで何かしらのイレギュラーが発生する恐れもある。そんな正当性のある、どこか歪なカナの思い。

けれどリクオの背中へと刀が突き刺さる、つららの雰囲気がより鋭くなる少し前。カナ自身の顔の横を風切り、人形へ向かって一直線に飛んでいく数個ほどの白い影たち。それらが人形に当たったことにより生じた、爆発にも近い大きな破壊音。

「陰陽師花開院家の名において、妖怪よ。あなたをこの世から……滅します!!」

最後にあどけなくも凛々しい、頼もしさすら感じられるゆらの陰陽師としての宣言。カナは自身の口角が、無意識に吊り上がっていくのを感じていた。

のちに清嗣の独断によって名付けられた人形騒動。大なり小なり何人かに思うところを残したその出来事も、時もたち今では既に先週のこと。カナ達人形騒動の時にいた面々は、学生にとって貴重な休みの日を各々が好きな服装で目的地へと歩いていた。

ただその顔触れが以前とは少し違う。カナに清嗣や島といった、積極的に活動へ参加するメンバーはもちろんいた。けれど同じように参加の頻度の多いリクオ、最近入った

ばかりの氷麗と倉田はいない。そしてその代わりと言っては何だが、あまり参加をしていない者二人が珍しくも足並み揃えてそこにいた。
「分かった、Cの姥火(うばがび)でしょ！　私の勘がそう言ってる！」
「ブー!!　巻きくんもまだまだね。気合が足りないんじゃないかい？」
「気合って、それ関係あるの……？」
「まあ勘て言っちゃってる方もっすけどね」
　目的地へと向かう際、雑談代わりに話すのはもちろん妖怪のことについて。中でも先週から異様にテンションの高い清嗣は、誰かしらに訓練と称しては妖怪のクイズを吹っかけていた。
「というより家長くん！　さっきから花開院さんと話してるけど君にはこの妖怪クイズが分かるのか――」
「Bのふらり火」
「あ、一応聞いてたんすね」
「また器用なことしとるな」
　清嗣の問いに対して、ゆらと話していたカナはたった一言のみで返す。一見素っ気なく感じるその態度は――話を途中で遮れば誰だってそうだが――けれどみるものが見ればそれも違う。

「(なんか、最近カナの機嫌いいよね。なんか変わったことあったっけ?)」

不思議そうにカナへと視線をやりながら、本人に聞こえぬよう小声で漏らしたのは巻紗織(まきさおり)という少女。

ロングの金髪に三白眼、そして中学生とは思えない程の大人びたスタイルが特徴の彼女。近頃あった旧校舎探検、清嗣の家への訪問等々。それらを用事があると断っていた彼女は、けれど今日に限っては自身から参加を希望していた。

「(ゆらちゃんで女子メンバーが増えたからとか……じゃあないか。私たちいるし、カナってそういうのあんまり気にしなさそうだし)」

不思議そうな巻の言葉に対し、自信なさげに鳥居夏実(とりいなつみ)が小声で返事をする。

黒髪を後ろ手にまとめた猫目の鳥居は、巻と同じく近頃は清十字怪奇探偵団の活動に参加していなかった。けれどやはり同じように、今日に限っては巻と同じく話を聞くや否や参加を希望している。

そんな二人がこそこそと意味あり気に視線を向けるカナは、実際清嗣に対する態度とは違って確かに機嫌が良さそうに顔を綻ばせていた。他の者には明確な理由こそ分からないだろうが、その雰囲気はひとえに先週の人形騒動について。

あくまで漠然としたもので証拠というものほどないカナだが、恐らくこの世界には物語のように妖怪がいると感じていた。そしてそれは、先週に人形が目の前で動いたこと

から確信に変わる。
　ただ仮にそれだけならば、妖怪の存在など望んではいないカナからすれば悪夢同然。清嗣でもなしに、半端にも物語がある分それもひとしおと言える。
　けれどあわや鬱エンドとなりかけた時、現れたのが陰陽師としての花開院ゆら。目で追えていたわけではないが、恐らく何らかの術でもって人形を滅する彼女の姿。
　それはカナにとって、清嗣のように本物の陰陽師がいたのだという感動に収まらない。比喩や誇張などは抜きに、この先の人生において明確な形で希望を感じた瞬間であった。
　そのため先週からカナの機嫌はすこぶる良い。カナの知る物語とは違い、巻や鳥居がこの場にいることも気にならないほど。
「(――心配だね！)」
　二人が珍しく来た理由の八割が、からかいということにも気づかないほどに。
「あ、見えて来たよ」
「おや、本当だ。それにしても相変わらずのボロ屋敷だね」
「あれがリクオくんの……」
　女子学生特有の乙女な妄想を繰り広げられているなど、当たり前だが一切気づきもしないカナ。けれどそのカナが目に入ってきた建物による一言に、妖怪の話に夢中だった

清嗣や他のみんなも気づき反応しだす。
見えてきたのはリクオの実家、話通りならこの場にはいないリクオが中で用意をして待っているはずだ。その外装は歴史を感じさせる、清嗣の家にも負けないほどの大きく立派な屋敷。そして今回の清十字怪奇探偵団の会議場として使う予定となっている。
『今日はもう遅いし、よければ花開院さんの話は来週にまた奴良くんの家でしょう』
先週起こった人形の騒動後。ゆらちゃんという本物の陰陽師に興奮冷めやらぬ様子の清嗣だったが、これで案外気遣いが出来る男。もちろんリクオに一言断りを入れてからの発言である。
同じメンバーである巻や鳥居もおらず、時間も夕暮れ時と既に遅い。そういったこともあり、来週となった今日この日に改めて話を聞くことになった。
「ごめん、遅くなっちゃったかな……?」
それから門前で待つことしばらく、リクオが少し開けた門の隙間から気まずげに顔を出した。
「以前来た時と比べれば十分だとも。さあ、花開院さんは初めてなのだからさっさと案内したまえ!」
「あ、リクオくん。私は別におかまいなく」
「はは、気にしないで花開院さん」

いつものことだから、そう苦笑いするリクオが屋敷の中へとメンバーを案内する。
庭には樹齢幾分あるであろう松の木に、小さくも赴きある綺麗な小池。屋敷内には障子張りされた白一色の戸が幾つもあり、先の見えない程長い廊下では床が光沢を思わせるほどに磨かれている。
絵にかいたような、それこそ今時文化遺産ぐらいでしか見ない日本屋敷。けれど以前も会議と称して来たことのあるカナ達はもちろん、ゆらも実家が京都なだけあってむしろ清嗣の家より落ち着いていた。
「広い聞いてたけど、奴良くんの家ってほんまにすごいんやね」
「おかげで妖怪屋敷とか言われちゃってるけどね」
案内された先はいくつもの畳が敷かれた大部屋。和式ということもあり、知っている者は記憶に新しい先週の人形を頭に思い浮かばせた。
けれど今は昼間ということもあって、障子からは外の暖かな日差しが差し込み、時折ししおどしの心地よい音色が響く。厳かにも落ち着いた雰囲気を感じさせるこの一室、誰一人に対しても嫌な空気を感じさせることはなかった。
「それじゃ始めよう。今日は花開院さんにプロの陰陽師の妖怪レクチャーを受けたいと思います」
「はい、そう……ですね。最初にこの前の人形、あれは典型的な〝付喪神〟の例でしょ

う。特徴としては――」

清嗣の促しによって始まるゆらの陰陽師としての妖怪レクチャー。他人伝いであり元々そこまでの興味はなかったため、巻と鳥居については半信半疑。けれどその他の清嗣や島にリクオ、中でもカナはとりわけ真剣にその話に耳を傾けていた。

巻や鳥居はともかく、清嗣達の感じる大体のそれは単純に、未知に対しての純粋な好奇心に畏れといったもの。けれどカナについてはそれ以上の、死活問題として考えているところが大きい。

カナは今まで清十字怪奇探偵団として何かしらと動いていたものの、清嗣のように自ら調べた例（ためし）は一度としてない。それは否定したいがためというだけでなく、世間に出回っている情報が全て正しいとは思っていなかったため。

正誤も不確かな知識などあてにならないし、下手に勘違いすれば危ないというもの。例を挙げるならば、べとべとさん。見た目可愛らしいが流石にあれはないだろう。

そしてそれに引き換え、現在話しているのは現役の陰陽師。本物を抜いて妖怪について聞くにはこれ以上の相手はいない。

「つまりそれは――」

「いいえ、そうではなくこの妖怪は――」

「え、ならあたしらの家にも……」

「もしかしたらおるかもしれんね」
「ええ!?」
　専門的な単語についても、一般人でしかないカナ達に配慮してか度々言い換えながら話すゆら。時に真剣に、時に冗談を交えながら繋げていく会話に、清嗣だけでなく興味が薄いと公言している巻や鳥居までも惹かれていく。
　理由こそあれだが、貴重な休みの日を潰してまでこの場にいる。友人との怪談話という割合も大きいだろうが、言うほど興味がないわけでもないのだろう。
　話は誰しも時間を忘れて続けられていく。途中、着物を身に着けた長髪の女性がお茶を持ってきたことで止まるも、カナ達が以前来た時に面識があったためすんなりとその場は流れた。
　そして全員がその身を乗り出さんばかりに聞き入り出したとき。この話も終盤だと、雰囲気を重くしたゆらが一拍おいてその口から言葉を紡ぐ。
「――そして、それら百鬼を束ねるのが妖怪の総大将。ぬらりひょんと、言われています」
「古の時代より彼らを封じるのが我々陰陽師。その縁(えにし)を――この地で必ず」
　もはやレクチャーや解説といった枠を超えた、妖怪に対する宣戦布告とも捉えられるその言葉。その表情には多少の陰りこそあれ、不安はついぞ見当たらない。ただ自身が

やるべき、行うことだという、傲慢とはまた違った一種の自信、使命感の表れ。
清嗣は感動で涙を流しながらスタンディングオベーションを決めた。

日もとうに暮れ、街灯の灯が徐々にその明るさを目立たせる横浜の中華街。ゆらはそんな場所を一人、京都より引っ越してきた家へと帰宅するために歩いていた。
ただ、今までの慣れ親しんでいた京都とはまた別の街並み。広く複雑な場所など京都だけでなくどこにでもある。だが、それにしてもまだ来て数週間しか経っていないゆらには辛いもの。
「ここ、どこなんやろ……」
端的に言って、現在のゆらは迷子だった。
リクオの家で妖怪についてレクチャーをした後、妖怪屋敷ということで案内の際に手持ちの札を張り周ったゆら。その後は特筆することもなく、また部屋に戻っては他愛もない雑談をし、適当な時間でそろそろかとその場で解散。
けれど清十字怪奇探偵団の活動のせいなのだろう。ゆらが思っていたよりカナ達が妖怪についての知識を持っていたため、つい熱が入って長く話し込み過ぎていた。そしてその帰り道、暗くなる前によく知っている道ではなく、あまり知らなくとも近道をと

考えたのがいけなかった。
ゆらにとっては少し遅く感じる時間も、街灯や店の明かりが多い中華街ではまだ人通りも激しい。未だ慣れない道を観光客や地元民にぶつかり、もまれ、気づけば来た方向すら分からない始末。
「おじょーちゃん、制服着てどこ行くの？」
「よかったら家まで送るよー？」
さらには先ほどから男女問わず、ゆらへとひっきりなしに絡んでくる人々。なんとか大丈夫だと躱してこそいるが、それも中々一人不安や寂しさを感じさせる。
ゆらがそれを予期していなかったといえば嘘になるだろう。何故なら引っ越す前にも重々注意をするようには聞いていた。ただ、これほどまでに複雑だと思っていなかったのも事実。ゆらは疲れてきた足を何とか動かしつつ、思わずため息を吐いた。
「ゆらちゃん！」
「え、どこどこ？」
「あそこだよ鳥居、街灯の下あたりにいる女の子」
不意に聞き覚えのある声、ゆらの視線が反射的にその方向へと動く。
「あ、家長さんたち……？」
視線の先にいたのは少し前にリクオの家で別れたカナに巻、鳥居の女子メンバー三

人。少し離れたところにいるが、慣れているのか人波にのまれないようにゆらの方へと迷いなく進んでいる。

ただゆらの記憶が確かなら、帰る方向が違うからと三人とは途中の道で別れたはず。ゆらにはどうして三人がこの場にいるのか見当もつかなかった。そのためどうすればよいか分からず、ゆらがオロオロと戸惑う間に三人は直ぐ傍にまでたどり着く。

「この辺危ないから別の道で一緒に帰ろ?」

「特にこの時間はなー。近道ってだけならちょっと暗くても変えた方がいいぜ」

「まあ私もカナが言わなきゃ忘れてたんだけどね」

言葉から察するに、三人はゆらが一人帰ることを心配してわざわざ戻ってきた。そのことに気づいたゆらは少しの申し訳なさと、それ以上の感謝で内心が満たされていくのを感じた。

「おおきに。恥ずかしいんやけど、実はちょっと迷子になっとったんや」

ゆらがはにかみながらもそう言えば、けれどカナ達は嗤うことはない。むしろ大丈夫だったか、と顔色を変えてまで心配し始める。

それにゆらはまたしても驚いた。まだあって一週間ほどという、決して長いとは言えない期間。にもかかわず、恐らく本心からだろう三人からの接しよう。

「ほんま、おおきにな」

生まれてからずっと過ごしてきた町から離れる。自分一人で妖怪の総大将を封じる。それら以外にもゆらは様々な悩み事や不安な思いを抱えていた。

けれどゆらは少し、それが晴れたような気がした。

「いやあ、四人ともいいね！　通りがかりで見てたんだけどオレ感動しちゃったよ！」

さあこのまま帰ろうかといった時、突如四人へと大きな声がかかる。

いきなりかけられた声に驚いた四人、その視線を一心に浴びるのは顔立ちが整った若い一人の男性。けれどその男性は金髪に派手な髪型、白のスーツといったあからさまにホストな風体。

わざとらしいその口調もあり、通りかかる偶然見ていたなど信用ならない。現にこういった場に慣れないゆらですら、なんだこいつはと言わんばかりに眉間にしわをよせていた。

「よかったらさ、このままオレの店で遊ぶなんてどう？　あ、みんなでどっか行くのもありかもね！」

「あたしらもう帰るから」

しつこいほどに四人を遊びに誘う男性であるが、見慣れているのか巻相手には取り付く島もない。素っ気なく返事を返し、カナ達三人の手を取りながら男の脇を抜けようとする。

「ちょ、なによあんたら」

けれど、いつの間にかカナ達を囲んでいた別の男たちによってそれも無駄に終わる。

にやにやと笑ながら、カナ達を逃がさぬように周りを囲むその男たち。全くという訳ではないが格好は一人目の白スーツと同じホストのようなもの。そのため関係性を疑わずにはいられず、初めに声をかけてきた男へと巻が背中に三人を庇いにらみをきかせる。

「下がって……巻さん」

「花開院、さん……？」

ゆらに声を掛けられながら巻が掴んでいた腕を逆に引っ張られる。それによってゆらが巻達を背に庇う立ち位置に入れ替わり、額に汗を浮かべながらその雰囲気を重くした。

「アンタら……三代目の知り合いだろ？」

気づけばあれほど流れていた人混みはどこにも見当たらない。周りには四人を囲むホストの格好をした男達に、話しながら近づくリーダー格のような白スーツの男。

けれど四人以外の誰一人として、ただの人間とは言い難い。何故ならじわじわと近づくその間、男たちはその顔を歪ませる。

「夜はまだまだ長いぜ？」

それは表情を、というわけではなく、それこそ顔そのものが徐々に人間からかけ離れていく。そしておもむろに髪をかき分ける仕草をした後、そこにあったのは異形の相貌。

顔には先ほどまでの肌色ではなく獣のような毛で覆われ、歯が並んでいるはずの口にはひと一人容易に噛み殺せそうな無数の牙。

「骨になるまで……しゃぶらせてくれよォォ！」

愉悦に歪み血走った瞳が、目の前にいるゆら達を捉える。

けれど、そんな中。

「カ、カナ……一体なんなの、これ」

ゆらが庇うように立つ巻の、そのさらに後ろ。目の前の事態を呑み込むことが出来ない鳥居が、隠れるようにしながら両手を使ってカナの服を掴む。

傍から見れば友人を盾にしているかのようなそれ。けれど、いっそ哀れなほどに震える少女を一体誰が責められるだろうか。

中には、もしかすればそう感じる者もいるかもしれない。だが少なくとも、掴まれている当人のカナはそう思わない。

むしろ安心するよう、震えながら服を掴む鳥居の手に自身の手を優しく重ねる。それどころか荒い息を鎮めるかのように、鳥居の背に手を添えてゆっくりと撫でながら、静

かな口調で言葉を紡いでいく。

「安心して、大丈夫だから」

怯えも、恐怖も、畏れもないその瞳。

見つめる先は、どこか作り物めいていた。